……なんの用で……、「ナーニ、兼て鞍馬の僧正坊をはじめ、木ッ葉天狗共まで是非遊びにきてくれと申し越してをるのだから、さいわひ昨今は無聊でもあり旁がた一寸あそびに行かうとおもふ」

伊豆守も重兵衛の言葉に一時は呆れた、が智恵伊豆といはれる程の彼れ、はやくも重兵衛の心事に何者かあることを覺られぬでもない、だが家來の手前顔にもださぬ、たゞ呆れた体を裝ほふて「ナニ、鞍馬山へ出張をせられると……それは御苦勞、しかし久々の面會なれば懷かしくおもふ、これより是非城中へお立寄りありたい」「辱けなふ存ずるが御身には何れへかお出掛けの御樣子……」

「イヤ〳〵無聊のあまり後方此方と巡見いたそうと存じたが別段差し當つた用向もござらぬ……兎に角これにて別れるはなんとなく本意なければ、「しからばお言葉に甘へて御供をつかまつる、「オヽ、それでは……」といふので行列を引き返すことにせられ、伊豆守には乘馬を供人に渡して徒歩になられよ

うとする模樣、これを見て重兵衛は押しとゞめた「イヤ伊豆殿、御身はそれでは恐れいる、どうか御懸念なくお召しなされたい、「イヤ〳〵、途中なにかと語しがある、しかるに一方は徒歩、一方は乘馬ではそれも叶ふまい、「オヽ、それなれば丁度さいはひ此處に竹中とやらの馬がある筈、それを借用いたす……これ竹中、其方前刻乘馬でまいつたな、あれを一寸貸してくれ」

重兵衛の言葉に代官はおどろいたが、何分にも仕方がない、領主のお目觸りになつてはとの懸念からはるか彼方へ引かした馬を組下の者によつて牽かしめた、此時はじめて竹中のをるのに氣がついた伊豆守「オヽ其方は竹中ではないか、いかにして此ところへ參つた」と聲をかけられたので、竹中重左衛門ほとんど恐縮の外はないといふのは、領主から代官へ直接言葉を掛けられるといふことは滅多にないことなので、「ハヽッ恐れいりまする、實はかよう〳〵の次第によつて一と委細の話しを言上すると伊豆守は非常によろこばれた「イ

ヤ重兵衛、どうも辱けない、身が領地に左様なる不埒者があつたとは何共恥いる次第であるが、よくも取り押へられた、「ナーニ、今すこし手硬い奴なれば面白味もあるが、これでは土人形を碎すより樂であつたから聊か張り合ひ抜けがいたした、ハ～～～～、「まづ委細のことは城中で聞くことにいたす取りあへず召されへ、「では御免をこうむる」とやがて代官の馬に跨がり、源十郎を供につれて、伊豆守と共にふた～び吉田に戻つて城中に向ふた。

さて城内に入つて以來の重兵衛、其言ふところは頗ぶる大きいので、伊豆守もかれてはその慢心のうへ、亂心したといふことを聞てはをるが、一つはその技量を試ろみ、且つはその高慢の鼻を挫こうと思はれた、それで一兩日滞在の後のことである、豫じめ屈強な家來に命を含めてをいて、何氣なく重兵衛にいふた「ときに重兵衛、過日來の話しでは辨慶といひ安部の貞任といひまた山本勘助といひいづれも御身の門弟となられ、かつは鞍馬山の僧正坊までも新

たに弟子いりせられようといふことであるが、それに相違はござるまいな、」「ハ～～～～、今更らお尋れになるまでもないこと、「フ～ム、しからば御身のおよばぬといふ武藝者は誰れじや、「されば、恐らく天下にござるまい、まづ此方は天下一の名人であれば……、

聞てはくれまいか、「ホーサ、いかなる相談……凡そ武道において出來得ることなれば、なんなりとも、「イヤ、それ聞て安心いたした、實は外でもない、この城内の乾の隅に當つて夜な～怪しの者が現はれるとやら、これに就て家中の者等が天狗の業ではあるまいかと噂さをいたしてをる、しかるにお恥かしき次第でござるが家來の内にこれを取つて押へようとするほどの者がござらぬので先般來心を痛めてをるが、このたび御身のこられたを幸はひこれを取り押へては賞へまいか、「ハ～～～～、何事とおもへば左様のことか、なんでもないこと、しかし伊豆守ともいはれる方の城内に左様のものがあるとは怪しか

らぬ次第……、「されば、それだから實は心を痛めてゐる次第、ついては願はれるか、「易きこと、今晩にてもとり押へる、「それは辱けない、ところがそれについて今一つお願ひがある、「フム、如何なることである、「餘の儀でもない、御身も聞かれたであらうが、この駿遠三の三ケ國は士農工商いづれを問はず秋葉大權現を非常に崇め奉つてゐる土地だ、それで秋葉山に對しては塵一筋もおろそかにせぬ慣しになつてゐる、ところであるから、此方も決して御幣を擔ぐといふ譯でもござらぬが、どうか其天狗共に傷を付け手もないのじゃで城内に出る者も萬一察しの通り天狗であれば首尾よく逃がしてくれるか、まだは生捕りさせられたいのだが、どうであらう、「フム、それは面白い、いかにも生捕つてみよう、「オツ、それも聞きいれてくれるか、それは辱けない、ついては今一ツ頼みがある、「ナニ、まだなにかあるのか兎の糞のように千切れ〳〵に申さずとも固めていはれたい、「ハ〜〜〜〜、イヤなに、御身を煩ら

はすのは今まうしたゞけであるが、他の頼みといふのはほかではござらぬ、實は斯ようのことは城外へ洩れてはこの伊豆守の威信に拘はるのみか面目次第もござらぬ、「いかにも御尤も、「それで家中の者ですら、一部の者の外誰れにも秘してある程でござれば御身もたゞ一人の腹中に納められ、一切口外の儀を堅く御無用に願ひたい、「尤もの次第、お言葉によつて毛頭口外は仕らぬ、假令供をいたしてゐる源十郎にも秘密にいたし、參るにも此方一人をもつて相向ふから安心せられたい、が序ながらお伺ひをいたす、その天狗とやらはどれほどでる樣子は御存じか、「さア、何分噂さを聞たゞけなれば確とは申しかれるが、四ツ五ツは出るそうである、「ナニ四五疋、こりや面白い、今晩は是非生捕でござろう、ついては聊かまうし兼れるが、重兵衛すこしくお願ひがある、なんとお聞きくださるまいか、「是れはまた改たまつた申しよう如何なることでござる、「されば餘の儀ではない、とてもの事に面白く生捕ろふと思ふ

によつて高さ三尋ばかりの檻を拵らへろよう命ぜられたい、「エッ檻を……、「いかにも……これも鐵の棒で出來得れば頂上でござれど、とても急の間には合ふまいによつて、とりあへず青竹でよからう、そのうちにゆる〳〵丈夫なものをお拵らへになつて入れ替られることゝせられたい、生命を斷ちさへせれば飼ふてをかれるものは秋葉權現へ對して差支へはござるまい、「フム、差支へはないが……檻の中へ……そいつア困つた……、「生捕は不可ぬかな、「イヤ〳〵無論生捕にして貰はれば生命を斷たれては困る……宜しいさつそく檻を拵らへさせよう、「オッ、それさへ拵らへて貰へれば此方も生捕るだけの甲斐がある、だがその檻は充分丈夫にいたされば萬一逃だすと厄介だ……フム、此方が差圖をいたして拵らへさそう、「ナニ御身が差圖の下に……、「どうだ惡いか、「イヤ〳〵惡くはないか……どうも恐縮……、「左樣な遠慮はいらぬ、それから今一つ頼みがある、「ホーウ、如何なることじや、「フム、餘の儀では

ない、世の中に天狗といへば珍らしいものであらう、「いかにも、「それで此方このたび鞍馬山へまいるのを幸はひ歸りには假令木ッ葉天狗なりとも一二疋土産に貰ふてきて上樣お慰さみに献上いたそうと思ふてをつたが木ッ葉天狗では面白くないから、幸はひ城内にでる奴が木ッ葉でなかつたならば生捕り賃に二疋ばかり貰つてもよいか、「エーッ、生捕つた奴を吳れ……そりや少々困る……、「ナニ困る、尤も皆吳れいとはいはぬ、四疋あれば二疋、三疋なれば一疋でよい、これも此方が樂しみにいたすのではない、上樣へ献上いたすのじや、臣としてかほど珍らしいものを主君に献上いたさずにをる譯にはなるまいそれも一疋なればなんとも申さぬ、二匹以上あれば差支へあるまい、「さればそうしられては少々不都合だが……仕方がない、まづ献上いたすことにしてをこう、「フム、然らばさつそく檻を拵らへさして貰ひたい」

重兵衛の言葉に流石の伊豆守も今更ら嘘だともいひかれて、直ちに檻を作ら

せることゝすると、重兵衛はその側についてをつて、なにかと差圖をいたし、容易に打ち壞されぬよう、念に念をいれて、やがて出來上つたのは約二間四方の至極堅牢なるもの、これを天狗のでるといふ城内の乾の隅へ運ばし、只管日の暮れるのを樂しんで待つてをる。

○天狗を生捕つて檻に入れた

話し代つて伊豆守の命をうけた五人の家來、いづれも家中において武術自慢の面々であるから、こりや面白い、われ〳〵一ッ天狗となつて自慢の重兵衛が鼻を今晩こそ挫ひでやると、おもひ〳〵に天狗の面を被り、白裝束を着用して手ん手に手頃の竹刀を携さへ、なかには二三匹の猿をさへ引つ張つたものがある、これ等は日の暮るのを待つて竊かに命ぜられた場所へゆくと、第一に目についたのは彼の檻であつた「オイ〳〵木村、こりやなんであらう、「さアど

うも可訝なものがあるな、オヤ一寸檻のようになつてをるではないか」といふ側から一人が「アッ、夫りやなんであらう、殿樣が兼れてお話しになつてをる鶴のいれ物ではないか、「アッ、成程そうかもしれぬ、「時に岡本、「なんだ、「こゝで柳生殿が來られたならばどういふ風にする、「いふまでもないこと、拙者が持參したこの猿をまづ一匹投げつけるのだ、すると如何な先生も一寸面喰ふだらう、其隙にのこりの奴をまたもや投げつけてをいて御同前が一度にかゝれば譯はあるまい、「フム、そりや譯はないがそれでは餘りに阿ッ呆無いから貴公まづ其の猿を投り給へ、「フム、それからどうする、「すれば先生は必らず面喰ふに相違がない、その隙に拙者はまづ打ちこまう、「オイ〳〵それでは貴公あまりに勝手過ぎる、拙者はこの猿を持つてきたのであるから、先づこれを投げてをいて拙者がさきに打ちこまう」と爭そうてをると側の人々は、「オイ〳〵貴公等味方同士で爭そふてをつては仕方がないではないか、今晩の

は別に誰れ彼れの手柄を定めるのではなく、相手の先生さへ甘く閉口させばよいのであるから、誰れが先きさいふことなく一時に打つてかゝらう、「フム、いかにも木村のいふ通りだ、一時に打つことにしよう」と漸やく話しが纏まつてそこで、誰れは何方、彼れは此處、何某は彼處、誰れ〳〵は何處と部署も定まつて、さア何時でも來いと待つてゐるおりから、四邊に心を配つて、ノソリ〳〵と出てきた重兵衛、やがて檻の傍はらへ歩み寄ると、おりから朧ながらも中天にかゝつた月は幽かに青白い光を洩らして、高く聳へた木立のあいだからその葉の影を凄く地上に洩らしてゐる。

だが元より大膽な彼れ、こんなことにすこしも恐れる氣色がない、くる道すがら片ッ端から大木の影、さては雲と茂る木の葉を透してそれと思ふものはすこしも眼界から逃すまじと兩眼に力を籠めて例のところまで歩みをすゝめ、どうも嘘らしい、すこしも影を見せぬではないかと獨りつぶやいて聊さか失望の

体でやをら芝生の上へ腰をおろそうとする一刹那、ハッと飛びかゝつたのは、一ッ、二ッ、三ッ、と三つの黒い影、なにかは知らず、さてはと飛びのき様、持つたる機扇をもつてポン〳〵〳〵と三ッに打ては三ッ共怪しげな聲を立てたまゝその場に平駄つた「アッ、さては木ッ葉天狗か」といひながら箱を開いてこれを投り込む途たん、杉の小蔭からバラ〳〵と飛びだした五ッの白い影、手ん手に得物を持つて打ちおろしてくるので、これもサッと身を躱し、其内の一ッは箱の戸の開いた口に立つてあるを幸はひ横からポンとはれると、思はずハッミを喰つたその者タジ〳〵となつてその中にノメリ込んだから直ちに外から戸を締めると、見るまもなく、手近の一ッは透さず飛びかゝつてくるを、利腕掴んでッドーンと投げ、起しもたてず、これも箱のうちへドッと引きづりこんで外から掛ケ金を箝めた、いまは殘つた三ッの者、互ひに少々薄氣味が悪くなつた樣子であるが、ムザ〳〵逃げる譯にも行かぬところから、一同を力にエイ

と三方から打ちこむ、これをバッと賺した重兵衛、躍りかゝつて右手は鐵扇、左手は拳を固めてエイと早速の當身をいれると、兩方ともウンとばかりドッと一時に倒れる、殘つた一ッはこの体に最早敵はぬと逃げだそうとするを、これも後ろから鐵扇に力をこめて肩口をポンと打てば「アッ」といふたまゝ尻餅をバッサリ、これも首筋つかんで箱の中へドンと投りこみ、氣絶したものも同じく投げこんだ投げこんで最早他に敵なしと見定めたのち、入口の戸に用意の錠前をピーンとおろして悠々と引きあげ、夜中ながら伊豆守の居間にむかふた、ところが伊豆守も重兵衛の高慢を挫こうといふ一時の座興かち、フトいひだしたことではあるけれども、重兵衛の勢ひたいひ、丈夫らしい箱の拵らへといひ、萬一家來の身に若しものことがあつてはと、氣がゝりでならぬ、それでいづれかゝら今になんとか報らせがあるであらうかと夜の目も合さず待つてをるところへ重兵衛がきたのであるからまゝ〳〵氣が氣でない「オゝ重兵衛、どう

であつた」と氣急はしく尋れる顏を「ハゝゝゝ、ナーニ天狗なぞとは衆外弱いものだ」と大口開いて笑ふ重兵衛のさまに「エッ、して何ういたされた」と思はず膝を進められた。

○上樣の御土產に天狗

伊豆守が急き込む樣にひきかへて重兵衛は頗ぶる落ちついてをる「オッ、ゆゝ〳〵ご話しをいたそう……がなにはともあれ酒を一杯頂戴いたしたい、「如何にも……これ誰れかある、直ちに酒肴の用意をいたせ」と命ぜられると次ぎの間に控へてをつた宿直の者「ハゝッ」と答へて遽かにこれが用意を調のへ、恐る〳〵運んできた、伊豆守はこの間も頗ぶる待ち遠いありさま「重兵衛、して天狗どもは別に殺しはせまいな、「さア、なるべく生け捕にいたそうと思ふたが、其内の一匹二匹はいさゝか手剛く當てたので、或ひはこれだけは殘念な

がら參つてあるかもしれぬ、しかし大抵なれば別條あるまい、「エーッ、一匹二匹は死んだかも知れぬさ……これは大變……、「イヤ〳〵騷がれな皆で五匹と外に木ッ葉どもが三匹をつたから一匹二匹は死んだところで別段苦しふござるまい、「さそれがその……なんだ、それが殘念である、たゞいまより直ちに見分いたそう。「イヤ〳〵、彼れ等は魔物でござれば夜中わざ〳〵御見分せられて萬一御身に過まちがあつては取り返しがつかぬ、のみならず、此方はいづれも檻の中へ投げいれ、確と錠前を卸したれば逃げる憂ひはござらぬ、御心配御無用、「エッ、それでは前刻の檻の中へ……どうも可愛そうなことをいたされた……、「ハ〳〵〳〵、これは以ての外のお言葉、毎夜〳〵城内を荒す不屆至極なる天狗どもではござらぬか、なにが可愛そうだ、此方は餘程打ち殺そうと存じたなれど、秋葉權現に對し恐れ多く、かつは上樣への土産に頂戴をいたして歸らうと存じたるによつて殊更ら手柔かく向ふだのでござる、「それは御

苦勞……しかし……、「然しも何もござるまい、最早明晩からでは憂ひはござらぬによつて安心いたされい……、「フーム……、「これは豆州には何ういたされた、俄かに顏色を惡くせられた樣子、御氣分が惡うござるか、「イヤ、ナニ少々寒氣のために、「ナニ寒氣……それは不可ぬ、暖たかき時候に寒氣をいたされるとは察するところ風邪でござらう……オヽ、幸はひこれなる酒を過されい、「イヤ、なにも大したことはござらぬ……時に重兵衛、一盞天狗を見分いたしたいが、「これは怪しからぬ、たゞいま承まはるに御風邪の趣むき、それに拘はらず深夜に外出さるゝはよくはあるまい、ことに天狗共は丈夫なる檻の中にいれてあればいかに狂ふても逃げだすような憂ひはござらぬ最早夜明けに間もあるまいから、明けるを待つて御覽になれば宜しからう、「フム……」伊豆守も天狗に化けしめた家來の身のうへは氣にかゝるが、今更らそれともハひかれるのみならず、宿直の者に命ぜられてそれを訪れさせようと思はれて

も何分側にゐる重兵衛の手前、それも明かしかれて獨り心を苦しめてゐるに引き換へ、重兵衛は今晩の話しから引きつゞいて例の自慢話しは、一層に花を咲かせ、グピリ〳〵と酒を煽つては「御家來衆、酒はござらぬぞ、はやく代りをおだしくだされい」

ところが話し代つて天狗に化けためん〳〵、重兵衛に向ふたが首尾よくさつて押へられ、みる〳〵檻へ打ちこまれたので暫らくは呆氣にとられておる「オイ木村酷い目に逢つたナ、「ごうもツマラぬ目にあつた、オヤこゝに倒れてゐるのは誰れだ、「ナニ……オゝこりや岡本ではないか……オイ岡本……シツカリせい、岡本……オヤ拙者の印籠が見へぬぞ、「オツ、こゝにも一人倒れてゐる……ヤツ、今野じや、オイ今野……確かりせい、氣付けをやらう、オヤ拙者の印籠もござらぬ、ハテナどうしたらう」と二人は兩人を介抱してゐる側に又た一人、ウン〳〵唸つてゐる者がある、いましも岡本を漸やく呼び生けた者は

これを聞きつけて「オゝ山本、貴公はどうした、「ナーニどうしたの何んのて酷い目に逢つた、何しろ貴公等バラ〳〵とやられた後に拙者が一人殘されたのだらう、だから聊さか便りなくなつたので……その……逃げる存念ではないが……一寸身を躱そうとする拍子に右の肩をイヤさいふ程打たれたのだ、「フム それからどうした、「さア打れたまでは知つてゐるが後は氣が遠くなつて今まで夢のようだつた、「ハゝゝゝしかし御同前に生命だけは助かつてまづは頂上だ……ところで西村……、「なんだ、「今野はどうだ、「フム、漸やく正氣がついたらしい、「アそうかそりや結構だ……がまでよ、こゝに何んだか變なものがあるぞ、「エツ、なんだ、「されば……毛のある……オヤツ、可訝いぞ動いてゐるわい、「ナツ、なんだ氣味の悪い……オツこれがハゝゝゝ岡本が持つてきた猿だ、糞面白くもない吃驚いたした、「ハゝゝゝ、天狗が吃驚する奴があるものか、「時に御一同何時まで此んなところに居つても仕方がある

まい、引き取つて殿様へこの始末を言上しようではないか、「だがこの事を言上いたしては餘り警れではあるまい、首尾よく五人はやられましたとでも申し上げろかな、「馬ッ、馬鹿なことをいふない、一同が大した怪我のないを幸ひ先生が一同の模様を見て一太刀二太刀を合されたが、途に逃げ出したと申してはどうだ、「そりや此方だけなればよいが、何れ先生からも殿様へなんとか申しあげろに相違あるまい、迂濶なことを言上しては反つて御答めを蒙むるかも知れぬぞ、兎に角、こんな檻の中へ這入つてをつては仕方がない、早く出よう、「オッ、今まで氣が付かなんだが如何にも檻の中だな、ウン早くでよう……オヤ、戸があかぬぞ、どうしたのだらう、「ナニッ、開かぬ、そんな事があるものか、ズッと突いて見給へ、「フム、突いても引いても開かぬぞ、「エッ開かぬ……待ち給へ拙者が開けてみろ、「フム、いかにも開かぬな、ハテ可訝い最前先生が開けたときは苦もなく開いたが……オッ、あかぬ筈だ大變だ、

「ド、どうした、「夫れ外側をみい、何時の間にか錠が下りてをる……、「ナニ錠が……こりや大變だ、それでは何處か壞たふか、「待てこの丈夫なものを壞てる筈はなし、また萬一壞つたところで殿様が切角鶴の檻に御拵へになつたものだから柯んなお咎めがあるかもしれまい、「フムそれではどうせう、「仕方がない、夜の明けろのを待つて誰れかきたならば開けて貰はふ、「オイ〳〵だがこゝは月の内に三四遍掃除人がくる外、誰れもこないぞ、「オヽ、そうだな……だが昨晩の事は殿様も御存じだから、一同が歸らぬ際には必らず誰れかにお申付けになつて來さすでござらう、「フム、いかにも……しかし我れ〳〵が斯ようのところにをる姿を同役の者にみられては面白ふござらぬな、丁度動物園の檻に入れられたゴリラ同様で……、「ハヽヽヽヽ、違ひない、幸はひ側に猿もをろぞ、「オイ〳〵、貴公等冗談ごころの騒ぎではござらぬ、一体どうしられる心算だ、「どうこうと騒いだところで仕方がない、兎も角夜の明ける

のをまたふ」といふ風に最初の内こそ悄氣てをつた人々も今は焦つて詮ないと諦らめたか、次第に冗談口の一ッもいふようになつて、たゞ夜の明けるのを待つてをると、殿中では伊豆守もまた重兵衛と話しながらに夜の明けるのを待つてをる、其内にいつしか東が白んで曉告げる島の聲さへ聞へ初めた、重兵衛どうじや、最早ジロ〳〵まいつてもよからう「左様でございますしかし月はまだ西の山に入りませぬ樣子、「イヤ〳〵、今は下弦の月であれば四ッか四ッ半頃までは殘つてをるわい、兎もあれ夜はまつたく開け放れた、これよりまいるぞ、「では此方も御供をつかまつる」と重兵衛もともに立たふさせられるを、一緒にこられては少々都合の惡い伊豆守「イヤ〳〵御身は大分疲れてゐよう、夜中なれば兎に角、夜も明けはなれたれば此方一人まいつても差支へあるまい先づこれにてゆる〳〵休息いたされい、「ハ、、、、、しからば御勝手にせられるがよからう、がなれどもお越しになるなれば天狗共にこれを御遣はし下さ

れたい」と懷中から取り出したのは五個の印籠、伊豆守はこれを見ておもはず呆れた「エッ、これは……、「されば、昨夜天狗共が所持いたしてをつた品、彼れ等を捕まへる際一ッづゝ千切つてたいたのであるが、最早返してやつてもよからう、「へーン……、「ついては一二匹だけを上樣の土産に頂戴いたそうと思ふたが、よく考がへてみれば不憫だから、御身もこれを御遣はしになつて直ちにお逃がしなさるが宜しからう、「エッ、さては重兵衛には彼れ等の正体を覺られたか、どうも流石の此方もこれには一本まいつた、「ハッ〳〵〳〵、どうだ親天狗の御身と一本立ち合はうか、「イヤそれには及ばぬ、どうも恐れ入つた」と流石の智惠伊豆もこれには返す言葉もなく、直ちに檻の中から五人の者をだして、改めて重兵衛の前で詫言をせしめ、後は笑ひとなつて此の事はすんだ。

◎大變だ　大變だ

さて重兵衛源十郎の兩人は、吉田の城中になほ一兩日滯在のうへ出立せられた、すると伊豆守においてはなか〳〵如才のない人なので、道中の領地になつて居るところの役人へ其ことを傳へ、何分慢心とはいへ聊か亂心の傾むきがあるから不都合なきようと命ぜられたは勿論、一方岡崎の城主本田家へも、また名古屋の尾州公、すなはち尾張大納言家へも特使をもつて此のことを知らされる、これによつてこの街道は何等の變つたこともなく、八橋の古跡、桶狹間の古戰場、其他彼地此地の名蹟を探つて無事に宮の宿まで赴むかれ、こゝには有名な熱田神宮のある處であるから夫れに參詣をすまして、やがて桑名道ひの渡船を問ひ合されると、明日の五ツ（今の八時）でなくば出ぬといふことであつた、尤もこゝで一寸いふてをくが今でこそ汽車汽船の便があつてそんな廻

りくどい渡し船に乘る人がないが、昔しの東海道を道中する人々はこゝから伊勢の桑名まで海上七里のあいだ、ことゞくこれにのつたものである、で重兵衛等は明日でなくば此の便がないといふことを聞たから仕方がない、其夜はこの宿に一泊しようと渡し場附近の鳴海屋といふ旅籠屋へはいつた。

處がこゝに尾張大納言義直公、松平伊豆守の知らせによつて重兵衛等が東海道筋を西に向つたと聞かれ、身は何分將軍家の連枝であるのみか、重兵衛は將軍家御指南番たる但馬守の長男であるので、當地方へまいるを幸はひこれを招いて將軍家ちかごろの御樣子も伺がひ、かつは重兵衛が武道の達人といふことも知られてをるので、都合によれば暫らく滯在せしめて家中の者にそれ〴〵指導せしめよと思はれた、が或はひ當地へ寄らず直ちに宮の宿から桑名へ渡るまいものでもあるまい、そんな場合まことに殘念であるから萬一街道筋にそれらしき者がをればたゞちに迎へるようと近侍の者に仰せられたので、近

侍は町奉行、代官等へ此旨を傳へる、傳へられた是れ等の役人は更らに掛り役人、宿役人に厳しくこれまた命ぜる、これも命ぜられた掛りの者等はさらに夥多の下役人を使つて街道筋、ことに宮宿の旅籠屋に向つて、二人連れの武士が泊らばたゞちに届け出るよう、もし怠たる場合には重き咎めを申しつけるといふことを觸れしめた、それで此のお觸れに接した旅籠屋はいづれも大騒場となつて、ついに二人連れの侍ひが泊ることを避けようとするまでになつたのである、しかし重兵衛はもとよりこんなことを知る筈がない、いましも渡船をでヒヨツイと目についたのはこの海鳴屋といふ旅籠屋、幸ひ是れに泊らうと何氣なく飛びこむと、これが爲めか下男はじめ下女までもみて見ぬふりをしてなつて、二度三度「許せよ」と聲を掛けても返事一言いふ樣がないので重兵衛も少々憤怒いた「こりや亭主はならぬか、此方前刻からあれ程言葉をかけてなるに何故返事をいたさぬ、無禮者……コリヤ誰れか出へ」と凄まじい權幕に、い

まゝで店になつな者等はバタ〳〵と逃げこんだと思ふ間もなく、おそる〳〵出てきたのはこの家の亭主「これは〳〵お武家樣にはよくこそお越し頂だきましたゝつきましては何か御用で……、「何か御用……默れ、其方は旅籠屋ではないか、旅籠屋にまいつた上は一泊いたそうと思へばこそであらう、しかるに前刻來再三言葉をかけてなるに何故返事をいたさぬ、其方の店になる者はことゞく聾であろまいどうじや、「へツ、どうも恐れいりました、ところで誠ときに濟みませぬが、手前の方は當分御侍ひ樣をお泊いたしませぬので……、「ナニ武家を泊めぬ、これは怪しからぬことを聞く、居間が閊へてをるために斷はると云ふなればそれでよい、しかるに當分武家を泊めぬとはなにごとだ、「へツ、これにはいろ〳〵譯がございますので……實はどういふ者か昨今二人連れのお武家をお泊めいたしまするこがが八釜しふございまして毎日〳〵お役人より嚴しい御詮議がございます、「ナニ、二人連れの武家を泊らすことは嚴しい

……フム、察するところ、なにか凶狀を持つた者が此邊にまいつたものと見へるな、「どうもそうらしふございます、「フム、それなれば何も心配いたさずともよい、此方は左樣の者ではない故決して心配いたすな。もし夫れともなにか懸念があれば旅籠代を前もつて渡してをき、また此方等の姓名を明らかに所役人へ屆けて置けばよいではないか、わずか二人の尋ね者のために澤山の客を斷はるにおよぶまい、「へッ……なるほど……それもそうでございますな……「どうじやそれで泊めるか、「へッ、では兎に角御通りを……」といふ風に不祥々々に亭主が承諾したので、足を洗ひ座敷にとほつて二人分の前勘定を支拂ひ「さア亭主、「へッ、此方の姓名はこれに認ためてある、これを所役人の許まで持つてゆけ、決して其方に迷惑をかける者ではないぞ「へ～ッ、恐れいりますると亭主はたゞちに重兵衛から渡された紙片をもつて宿役人の番所へ屆けてる、宿役人は制規によつてこれを代官所の方へ持つてでた。

さて重兵衛源十郎の兩人は前刻來この家の亭主の話しに不審を抱いたが、自分等のことには關係あるまいと、やがて湯浴もすみ、食膳に向ふて互ひに其日の道中の話しを何かとして居るおりから、にはかに慌たゞしく飛んできたこの家の亭主「タッ、大變でございます、コッ、これですからお斷はりしましたので……」といふ聲に重兵衛は思はず振りむいた「亭主、どうした、「ヘッ、タッ、大變で……、「ナニッ、大變……全体どうしたのだ。「へ～ッ、吃驚なつちや不可ませんぜ、折角ながら貴君方ぼ助かりますまい、「これ〳〵なにが助からんのだ、譯をまうせ、「いひますから慌て～はいけませんぜ……、「なにも慌て～はならぬ、其方こそ慌て～をるではないか、はやく譯をまうせ、「～ヘ、そのまいりましたので……、「まいつた……何がじや、「ビッ、吃驚なすつちや不可ませんぜ、御城下からその……お奉行樣が……、「ナニ、奉行がま、つたと申すか、なにが此地に用があつてまいれば別に不思議は無いではな

いか、「そツ、そりやそうでございますが、それがその……貴君方を引ッ張りにきましたので……、「ハ～～～、馬鹿なことを申すな、「イエ、全たくでございます、前刻届けでたお武家に用があるから直ぐ引き下せッと大層御立腹の様子で……、「左様のことをまうすまい、此方に面會をいたしたいから取り次げと申したのであらう、「メッ、滅相もない、相手が御城下の御奉行様でございますぜ、失禮ながら貴君方に左様のことを申しますものか……兎に角お覺悟をなさつて早くお降りなさいませ、「イヤ～～、苦しふないからこれへ通れと申してくれ、「ヘーン、苦しうない……バタ～～そんなことを仰言ては此方が苦しうございます、もし御奉行さまがお役人を連れてタバ～～ここ～へあがつて御覽じろ、貴君方はジッとしてはをりますまい、直ぐ側にある膳をほろ、煙草盆をなげろ、たちまち大騒動をはじめるは必定、そんなことをしられてはたまりますものか、この疊は漸やうこの正月に仕替ましたるもの、襖はまだ張

り替へて間がございません、さアごうぞ下てください、「なんと申しても此方等は下りぬから、奉行がきてをれば苦しうない通れと傳へてくれ、「ごうも仕方がないな、わずかな旅籠代を貰つてエライ事ができた」と口の内でボヤキながら店先きへゆくと、そこには名古屋の町奉行速水藤十郎は亭主の返事を待ち兼れてをるところ「亭主ごうじや、お差支へがないと申されたか、「ヘッ、どうも堅意地な奴で困ります、「コレ～～、何か何ういたしたと、「ヘッ、盜人丈々しいと申しますが全たく仕方のない奴で……このうへは御奉行さまへ御願ひがございまする、「其方の申すことは丸ッ切り判らぬが、願ひごとがあれば手續きをもつて役所へ申してまいれ、「ヘッ、それが其……間に合ひませんので……何分いまに迫りましたことですから、「コレ～～、此方も急ぐのだ、だいまの返事はなんとであつた、「さア、それに就きまして御願ひでございます、「ナニ、それに就ての願ひ……全体なにごとじや、「ヘッ、に、いまお越

になりましたことを二人の奴に申しますと、餘程圖々しい奴で下りて參らうともいたしません、ですから此上は踏み込んでお召し取りのことゝ存じますが、何分盛襖等は、仕替へて間もございませんので何分にもお手柔らかにお願ひをいたします、「控へッ、「へゝッ、「其方はなにを申してをるのじや、「へッ、「二人の方を召し捕に向ふたとは誰れがまうした、「でもかれてお觸れのございましたお尋ね者で……、「默れ、して此方が申したことを何んとつたへた、「御城下から御奉行樣がわざ〳〵召し捕りにお越しになつたから早く下へをりろと申しました、「怪しからぬことを申したな、さだめて御立腹になつたであらう、なんと申された、「へッ、ところが吃驚して逃げ出すかと思ひましたら、ナーニ圖々しいものでございます、平氣に構へまして、此方に面會いたしたい申してをるのであらうと申しまして、其次ぎは介意はないからこれへ通してくゝれと大平樂を吹いてをります、へン本人は苦しふないか知りませぬが

此方は何ぼう苦しいか知れませぬ、一体ありや氣狂ひでございますか、「控へッ、其方等の知つたことではない、しからば案内いたせッ、「へゝッ、御案内はいたしますが何分にもお手柔らかに……」

○重きた答めが恐ろしく御座り奉る

亭主の案内によつて重兵衛の部屋の前へきた速水藤十郎、襖の前へべッタリ座つた、此体をみて亭主はおどろいた「モシ御奉行樣、そんなことをなさつては中から飛び出してはどうします、「控へッ、其方等の知つたことではない、「へーン、「其方氣の毒ながら取り次ぎを賴む、「へッ、タッ、誰にッ、「誰にでもない、この内にお居での方へだ、「ナン、なんと申せばよろしいので……、「名古屋町奉行速水藤十郎お目通りを願ひまするとと申してくれ、「お目通り……全體あのお武家は何誰樣で……、「何誰樣でもよい、はやく取り次いで

くれ、「ハーン」と亭主は呆れたまゝ容易に取り次ぐ模様はない、このさき部屋の中にをられた重兵衛、この様子を聞かれたか「これ、苦しふない、これへ這入れ」といはれた聲に藤十郎はおもはず「ハゝッ」と平伏して靜かに襖を左右に開いた、「ハゝッ大先生にははじめて御意を得まする、某しは名古屋の町奉行速水藤十郎と申すもの、かれて家老杉山武左衛門よりの申されて居りますには、大先生當地方へお越しになるを、主君義直殿非常に待ち兼れてをられば是非お迎へをいたせとの事にございまする、つきましては本日の御道中さぞ御疲勞の儀とお察しはいたしますなれども枉て尾州家までお出を願ひあげまする、尤も此儀につき家老杉山伺がふべきの筈、何分にも當家へお越しのことが只今ようやく承知いたしたるため家老の方へ通知いたしまするまもなく某し相伺がひました次第にございますれば此儀何卒悪しからず御賢察をれがひまする、「やアそれは御足勞でございつた、實はこれより直ちに桑名へまいる筈で

あつたが船の都合で當地に一泊いたしたのであるが、此方がまいつたことを城中へ知れては伺がはずにはをれぬ、しかしかれて家老から申し付かつたとすれば何者か前もつて通知をいたしたのであろうな、「ハッ、深くはぞんじませぬが、松平伊豆守様から御使ひがあつたように心得まする、「ハゝゝゝ、そうであつたか、しかし其方わざ〳〵御苦勞である、ついてはこれより直ちに向ふてもよいが、すでに日も全たく暮れはてた様子、これより參つて、にわかに雑作をかけるも氣の毒であれば明朝ゆる〳〵出掛けるであろう、杉山へも可然傳へてくれい、「ハーッ、恐れいりまする、左様なれば明朝あらためて御迎へにでますれば何卒お待ちを願ひますする」さやがて退がつてくるのを、先程から襖の陰に氣味悪る〳〵扣へてをつた亭主、速水の退がる後ろから店先きまで付いてきたが「一寸御奉行様にうかがひます、「なんだ、「一體あのお武家様は誰樣でございます、最初はお上のお尋れ者かとおもふた程でございますが…

……、「扣へい、あの方は汝の樣なところへお泊りになる方ではないぞ、「へエー……、「今晩御一泊ののちは明朝城中へお迎へ申す筈であるから無禮のないようにいたせ、萬一背くときには重きお咎めを蒙むらねばならぬぞ、「エヽツー、そツ、そりや御奉行樣御無理でございます、尤も好んで無禮はいたしませんが……何分……その何分そんなことが慣れませんから萬一にも過まちがございましては……、「まアなんでもよい、心から恐ろ〳〵樣子を伺がふてをれば萬事大目に御赦し下されろであらう、尤も言葉なぞも餘りゾンザイなことを申してはならぬぞ。なるべく叮重にいたせ、「畏まりました」

奉行は不都合のないよう亭主にいひ殘して歸つたから、後で亭主は大騷ぎをはじめた、にはかに上等の間の客を開けさして重兵衛を其室にうつす、そして一切の用事は女中や下男にも任さず、自から羽織袴で伺がふてをつて、重兵衛の一言一句には腫れ物にても觸るような調子「亭主、「へヽツ、いかなる御

用事でござり奉つりまする、「酒を一本持つてまいれ、「畏こまりたてまつりまする、「コレ、どういたしたのだ、「別にどうもいたし奉つりませぬ、「へヽヽヽ、大層奉つるをまうすが、察するところ速水とやらがなにか諜言たか、「へツ、諜言り奉つりました、「左樣のことを申さずと、いまゝでの通り普通にまうせ、「普通へに申し奉つるは、ツツと樂でござり奉つりますが何分その、重きお咎めが恐ろしくござり奉つるによつて窮屈ながら斯ようにまうし奉つる、「ナニ重きお咎め……左樣のことはない、さだめて窮屈であらうによつて止めるがよい、「へツ、ではお許しくだされ奉りますか、ヤレ〳〵これで壽命が延び奉つる」といふ樣なありさまで可哀そうについに其夜は次の間に扣へて一目も寢まず番をして居つた。

さて翌日になると昨日きた町奉行の速水が立派な駕籠を吊らして迎たへにきた、で重兵衛はこれに乘つて源十郎を駕籠脇にしたがへ、速水の案内によつて

名古屋の城内へ罷りこすと、太守義直公には非常の御滿足、すぐさま御前へお召しになつて將軍家の御消息をなにかとお聞きになつた後「ときに重兵衛、このたび東海道を此方へまいつたと申すことを豆州から申しこしたが何れへまいる心算じや、」「ハツ、兼れて鞍馬山の方より某しに武術の敎授をいたしてくれるよう、再三申しこしましたるにより、このたび身にいさゝかの閑を得たを幸ひ、これよりまいろうかと心得まして……、」「なんといふ、鞍馬山から招びにまいつた……はて、鞍馬山の誰れじや、」「僧正坊からの使ひでございます、」「フヽーム」れば多分木ッ葉天狗共に敎へられたいと申すのでございませう、と意味ありげに考がへられた義直公、やがてニッコと笑まれて「それは面白からう、しかし重兵衛、その天狗共とやらは矢張り將軍家に仕へてゐる者であるか、」「ハツ……どうも其儀は確とまうし上げかねますが何分將軍家の御恩澤によつて我國土に住みをります彼れ等にござりますれば聊さか敎導いたしまするも宜しからうと存じまする、」「フム、いかにも敎へるもよからう、しかしじうじや將軍家に仕へてをるや否や、疑がはしいものを敎へる前に、將軍家のため確かに盡くそうといふ者等を導びいてはくれまいか、」「ハツ」と流石の重兵衛もこれには弱つた「尤とも永くをれとはいはぬ、せめて兩三年のあいだでよい、其間當國に止まつて其方の流儀を予をはじめ一般家中のものに傳へて、貰ひたい、」「ハツ」

これには重兵衛も恐れいつた、何分陪臣とはいへ兎に角御三家中の家臣にそれに敎導を斷はつて、假令嘘にもしろ鞍馬山の天狗へ敎へに行くとはどうしてもいはれぬ、慢心したかのように思はせようとしたのは今は仇となつたのである、といふて將軍家からひそかに命ぜられてをることを疎そかに兩三年も捨てゝをくことは出來ぬから、ほとんど其返事に困つた、でいろ〳〵と考がへたすへ「畏こまりましてございまする、なれども某しはかれてお聞き及びでもご

ざいませうが天下の名人でございまする、この天下の名人が手を取つてお教へ申すには二年三年の長き月日は費りませぬ、まづ普通のものに十年從がふなれば某しに一年、また五年で學ばれる者ならば某しに半歳稽古になれば充分でございまする、されば半歳某しによつて稽古をせられ、まだ上達いたさぬ者がございますれば此上如何程學ばれても見込みはございませぬ、それで見込のない者は何日までも教へることは出來ませぬから、まづ半歳だけはお言葉によつて御教導いたしませう、「フム、いかにも其方申すところ尤もである、しからば明日よりさつそく稽古をいたしてくれ、「畏こまりました、しかし某しに稽古をいたして貰ふ御家人はまことに僥倖せにございます、その名人が不思議なることから各某しは又と得難い天下の名人でございます、なにを申しても各方へお教へ申すことになつたのであるから、疎そかに稽古をいたされてはなりませぬぞ、いづれも方ふかく御悅こびになつて勵まれるよう」と人もなげな

る廣言、これは重兵衛殊更らに一同を怒らせ、これによつて義直公の不興を買ふようなことがあれば直ちに出發しようと思ふたのであるが、並居る諸臣は一時は顏を見合して呆れんでもなかつた、しかし重兵衛がかれて慢心してをるといふことは聞てをるから怒るものは一人もない、いづれも「ハヽア、さては病氣も全快せんのか、しかしどれ程慢心してをるとも實際腕さへできれば習ふのに差支へはあるまい」と思ふてをれば、太守は太守で「言葉の慢心は病氣だから已をゑぬ、しかし腕は實際高慢する程出來るのであるから、是非當地に留めをきたい」と考がへられてをるので誰れも氣を惡くしたものもない樣子、これにも首尾よく當が外れて、ついに暫らくの間此地に足を止ることゝなつた。

○手では教へぬが心で教へる

いよ〳〵名古屋に足を止めることゝなつた重兵衛、その翌日太守の御前へ

でると、何分非常のお待ち兼れであつた太守「どうじや重兵衛、さつそく稽古をいたしてくれるか、」「畏こまりました、ついては御家人中相當に出來まするもの數名お召しだしに預かりたふぞんじます、」「フム、出來る者と申して……師範役でも苦しふないか、」「ハツ、何人でも結構でございます、數名さへござりますれば、」「オヽ、では吉村」と呼び寄せられたのは尾張家の劍道師範役、「ハヽツ、」「其方の見込みによつて家内のうち、腕の達者なものを數人選んでみい、誰れ〳〵である、」「左樣でございます、まづ……山口、田中、倉田、柴田、深井……それから石川くらいのものでございます、」「フヽム、しからば早速これへ召し出すよう、」「畏こまりました」とたゞちに御前へ召し集めた、これを御覽になつた義直公「重兵衛、彼れ等は家中で相當出來るものであろそうじや、」「左樣でございますか、それでは恐れいりますが御一同に御稽古場までお越しを願ひまする、」「オヽ、一同のもの、しからば參れ」と公は先に立つて

道場へはいられる、このとき重兵衛は家人一同にいふた「ときに各方、此方は一向何れもの腕を存ぜんによつて先づお手合せを拜見いたしたい……ついては最初、山口氏とやら、其許是れなる御人と一本試合いたされよ、」「畏こまつた」と家人の山口はいま一人の倉田といふのと試合をはじめる、ところが稽古とはいへ太守は側近く居られるところへ有名な柳生重兵衛が側にをる、また師範の吉村先生も見てをるといふのだから兩人共ほとんど一生懸命の立ちあひ一時餘りといふものは互ひに勝劣はつかぬ、もの〳〵二時ばかりもかゝつて漸やく倉田が勝つた、つゞいて重兵衛は「倉田氏とやら天ツ晴である、今度は其許これなる御人と試合をいたされよ、」「畏こまりました」と相手を呼びだしたのは石川といふ人、これも互ひに睨み合ふて容易に勝負がつかぬ、ようやく一時半ばかり經つて石川が勝つた、が初め此の試合にかゝつたのは今の九時頃からであつて二ツの勝負に三時半（昔しの一時は今の二時間となる）すなはち現今

の七時間もかゝつた譯であるから其内に七ツのお太鼓が鳴る、すると重兵衛は「最早退城の時刻にござりますればお稽古は明日にいたしまする」とそのまゝ退る、翌日になれば昨日の殘りの者の勝負をさせて此日も其まゝ退城る、又その翌日出仕をしては勝つた同士の勝負をせしめる、といふ風に數日のあいだは家人の仕合のみを見てをるばかり、やがてそれも一通り當つて仕舞ふた、翌日、同じく出仕をして相かはらず稽古場へゆくと、公には「重兵衛、最早家中のものゝ腕も一通り判つたであらう、どうじや今日は予の稽古をいたしてくれるか、「左樣でございます、どうも未だ出來かねまする、「ナニ、まだ予の稽古はできぬか、「仰せの通りにござりまする、今日は貴君とこれなる山口とお試合を拜見いたしまする、「フム、いかにも心得た、山口、さアまいれ、「ハッ」と支度を整のへた山口、太守義直公を相手に立ち合ひにかゝる、ところが何分相手が主君であるから充分の隙があつても容易に打ちこまぬ、たゞ打た

れぬよう自分の身を守つてをるのみであつたが、そのうち公が打ち込んだ一本の太刀、首尾よく山口の面を打つて「參つたッ」と恐れいる体に公は御機嫌斜めならぬ、しかし其技量においては山口の方がはるかに上だ、重兵衛はこれを見て竊かに苦笑ひを洩らし「御前、今日は最早御疲れのよう見受けますれば何れ明日お稽古をつかまつりまする」と下る、又たその翌日になると田中に公の相手をせしめて下る、その翌日は倉田といふ風に一巡ズツと廻らして其又次ぎには「どうも山口は御前に向ふてなにゆへ遠慮をいたしてをる、それでは實際の勝負が判らぬから今一應御相手をいたして見せてくれ」といひ、次ぎの日は同じく田中といふ風になんさか斯んさか口實を申しあげては公と家人とに勝負をさしては只だその指圖をするばかりでジッと見てをることが二月にも及んだこれには流石の義直公もついに痿痺を切らした樣子「重兵衛、毎日家中のものを相手にいたして居るようでは少しも面白くないぞ、其方はなにゆへ稽古を、

たしてくれぬ、「ハツ、某し畢竟手をもつてお教へをいたしませぬが、しかし心のうちでは毎日一生懸命にお稽古をいたしてをる筈でございます、「ナニ心のうちで教へてをる……何うしてそれが教へられるか、「其譯はたゞいま申しあげずとも自然にお判りになりませう、兎に角最初お手の内を拜見いたしましたる際より失禮ながらちかごろ餘程御進みのよう伺がひまする、「控へツ、これは其方の教へによつて進んだのではない、山口、田中なぞを相手にいたしたれば結果であるぞ、「さればでございます御家中の方々をお相手にいたされたとは申せ、つれ〳〵の御稽古よりも非常に早く御進みになつたこと〻察せられますまた御家人にあつても某しが此のところに見てをりまするため、いづれも非常に氣を張られてをる樣子、從つて使ふ太刀筋も穴が出來ませぬ、太刀に穴が出來ませれば自然それだけの上達を致されたるものにございませう、「フーム、なるほど其方の申すところ一應尤もである、しかし腕は假令上達いたしたりとも、其方の流儀をいたす柳生流はごうして傳へられてをる、「ハイツ、これは恐れいりましたるお尋れ、其儀は一切傳へてはをりませぬ、「ナニ……、「他流によつてすでに今日まで上達せられてをる各方に對し、新たに柳生流をお傳へいたせば反つて冥冥になりまするのみ何等の足にもなり兼ねまする、それとも一時にお習ひになりましたる流儀をこと〴〵く捨て、さらに劍の使ひ道より御修業になられる御心底なれば無論御教へはいたしますが、それでは各々方これまでの苦心は水の泡となりまする、此儀しかるべく御賢察の上如何ようとも御意のまゝ隨がひませう、「フーム……なるほど尤もの話しである、いかにも其方の申す通りだ、予が強て柳生流を傳へよと申したは過りである、されば此上は心だけを教へてくれ、「ハツ、恐れいりまする、「しかし其方の名人なることはかれ〴〵耳にもいたし、予も認めてをるが、一つその極意を家中の者に見せてやつては吳れまいか、「ハツ、いかにも承知つかまつりました、何

時なりとも御覽にいれまする、「フム、さつそくの承諾悦こばしう思ふ、日時は追て沙汰をいたすによつて左樣心得るよう、「ハ～ツ」と其日はお受けをして引き取ると、殿中ではさつそく重役方が協議のうへ、來る十五日城内の馬場において行はれることに取りきめ、此段たゞちに重兵衛へ通知をせられると共に當日は士分以上の者は參觀を許されるのみか、その十名を限つて望みの者に重兵衛との立會を許される旨家中一般に傳へられた。

○勝つては氣の毒だ

重兵衛が柳生流の奥儀をみせ、かつは十名まで立會を許されるといふことが一般の家中に傳へられたゝめ、殿中になる諸士といふ諸士は寄ると觸るとこの噂をせぬすのがない程、從がつて常に武藝自慢のものは競ふてその立合を重役の手許まで申しこんだので、十名の定員はたちまちに充ちて、其數すでに五十

を算するに至つたから、重役もどうする事もできぬ、其内免るべからざる情實もあれば、また家中拔群の達人もあり、かつは主君の指名になつたものもあるので、勢ひ何れを取捨することもできぬ始末、つひに是れが取捨に迷ふて重兵衛の許へ相談するに至つた「實は斯樣に澤山の申し込み何うもどれを省くといふ譯にはまいらんので、なんとかよい工風はござるまいか、「ホ～ウ、それは結構、澤山ある程張り合ひがござる、「へ～ー ッ、しかし五十名もお相手になつては第一御疲勞も察せられまするのみか、時間がございません、「無論、一人々々相手をいたしてをつては到底時間がたまるまい、オ～御前よりのお言葉には幸ひ柳生流の極意を見せよとのことであつたから、しからば多人數を相手に試合をいたしてみる、「ナニ、それでは五十名を一時に……、「ハ～～～、別に驚くにおよばぬ、どれ程の達人ありとも此方は天下の名人だ、五十名はさておき百名に及ぶとも苦しうない、「ドツ、どうも恐れいりまする、尤も

五十名百名は御構ひございますまいが、それでは餘り……、「ハ～～～～、併したゞいまの話しでは申込みが多人數のために何んとか好き法はあろまいかと申し越されたのではござらんか、さればこそ此方において、それ等の者を一時に相手さいたせばよかやうと思ふたまでなれども、一人〳〵の試合を望む者があれば十名迄は許す、「ハツ、では十名の外に多人數お相手さいたされるので……、「元よりである……が一寸序ながらきくが師範役の吉村はでまいな、「ハツ……、「技量の如何は兎に角、かりにも一國の師範役たるすのが、かるく〳〵しく出るようなことはあるまい、「ハ～ツ、恐れいりますなれども、このたび先生のお手合せを願へることゝて非常に樂しんでをる樣子……しかし彼れがでますれば先生にはなにか……、「イヤ〳〵此方はすこしも嫌はぬが、彼れのためを思ふから申すのだ、「それは如何なる譯で……、「いふまでもないこと、吉村も一國の師範役であれば家中の方々から劍道においては尊敬されてを

るであらう、それを此方は假令天下の名人さはいへ兎に角試合の結果、打ち負ればさだめて一同の手前面白くあるまい、それもだ、奇麗に敗れを取ればまだしも萬が一にも見じめなことを致しては自分ながら面目を失なう樣なことゝなるであらうから、成るべくなれば控へさすがよからう尤も此方はいさゝかも嫌ふのではないぞ、「ハ～ッ、これはあり難き御思召、たゞちに傳へまする、なほお試合の方はそれでは多人數一時に願ひましても宜敷ございますか、「オ～いかにも苦しうない、「しからば番組の儀は何れその心算をもつていたしまする」と再び詰め所へ取つて返した重役、他の人々に番組のことを傳へておいてさらに別間へ師範役の吉村をよび、竊かに重兵衛の旨をつたへたが、元來の傲慢な性質は自からをしる明を失ひ、其言はれた言葉にます〳〵反抗の心をおこして「察するところ柳生殿には某しの武名に恐れられ、体よく某しとの試合を避けられるものと存ずる、不肖ながらも尾州家の師範たる某し、不幸にして相

打ちをいたすことありさも敗れを取るべき程の未熟ではござらん、されば柳生殿が某しとの試合について左程までもお嫌ひなれば、穏やかになぜ其旨を申しこされぬ、お話しさへ判れば仰によつて此度の試合は思ひ止まるなれども、反つて恩義かましき事をもつて脅されては是非共勝負をいたす」といふ鼻息の荒い返答にこれをも強て止める譯にもならぬから、再び其趣きを重兵衛につたへ、番組のうちへも記すことゝせられた。

かくて程なくその番組は家中の誰れ彼れに傳へられ、等しく耳目を騒がしたが、なかにも多人數相手に重兵衛極意の試合を行ふといふことは、甚だしく喧傳さるゝに至つたので源十郎は竊かに心を惱ました「このたびの御試合には多人數をお相手にいたされる趣き元より先生には充分のお見込がございますとは存じますが、しかし多少のお支度は成らずとも宜しうございますか、「ナーニ心配ハたすこ及ざロ、相手は三ツ子も同前の者ばかりだ、百名二百名まいるとも厭はぬぞ、「ヘエー、しかし何分にもかれて武道の熱心をもつて聞へました尾州家でございますれば、御油斷はなりますまい、「ナーニ、萬一思ひの外強ければひさ〳〵で鬱氣も晴れるであらう、何分ちかごろは敵らしい相手には出會はぬからなんとなく氣脱のいたした折柄だ、ハヽヽヽヽ、其方等懸念いたさずともよい」といふ調子で一向平氣でをるので、源十郎も二言といはず口を閉ぢ、心の内ではます〳〵重兵衛の身の上を氣遣ふてをるのみであつたが、しかし肝腎の重兵衛は胸に充分の期するところがある、たゞ其日のくるのを樂しんで待つてをつた。

ところが日もおひ〳〵と迫つていよ〳〵明日は試合といふ十四日の夕暮のことであつた、重兵衛はかれて貸し下げられてをる邸に退城つて一室に通り、源十郎を相手になにかと四方山の話しに餘念のないをりから、これも尾州家の好意によつて邸に添へられてをる一人の下男、おそる〳〵次ぎの間に兩手を突い

た「申しあげます、「オヽ、毎日御苦労である、なにごとか、「ハヽッ、たゞいま風体は卑しくはございますれど、是非御前様にお目通りをいたしたいと申してまいりました者がございます、あまりに見苦しくございますため、いろいろ追ひ返へすよう申しましたが一向に立ちさりませぬ、如何計らひませう、「ナニ、いやしき風体……両刀を手挾んでをるか、「両刀は見受けませぬ、と申して町人でもございませぬ様子……、「フヽーム……オヽ兎もあれ源十郎、其方御苦労ではあるが何用か尋れてまいれ、「ハッ」と下男の後について玄関へ出てみると、その片隅に身すぼらなき風体の五十許りの男がおそる〳〵立つてをつたが、源十郎の姿を見るとそのまゝ、小さくなつて敷莚に両手をついた、

「これは〳〵大先生様にござりまするか、下郎の身として恐れ多くもお伺がひいたしまして誠に相済みませぬ、「此方は先生ではないが、いかなる用件である、ことによれば取り次いで遣はす……見受くるところ、手の内でも合力

いたすか、「ヘヽッ、かヽる風体をいたしてをるため、御察しの段は御尤もでございまするが、実は明日大先生の御試合について折り入つてお願ひがございまする、「ナニ、明日のお試合についてお願ひ……いかなることである申してみよ、「ヘッ、実は大先生のお力によりまして、私し主人の敵を討つて頂だきたう存じまする、「ナニッ、敵……オヽみれば風体に似ず健氣なことを申す、いかなる次第である、申してみい」

源十郎も敵を持つ身、今敵といふ言葉を聞ては同情の念にかられずにはなられぬ言葉と共におもはず一膝進ますと、彼の男も追懐の念にうたれたか両眼に溢れた涙は両の頬をつたうて、バラ〳〵と敷莚の板を濡らした。

○主人の敵を討たしてほしい

やがて右の拳をもつて両の眼を拭ひ、諄々として語りだした「ヘヽッ有り

難う存じます、見る影もない私しが、かようのことをお願ひ申すは、まことに恐れ多い次第でござりまするが、なにをお隠し申しませう、この御家中には寢ても覺めても忘れられぬ主人の敵がございまする、つきましては、かれ〳〵一と太刀なりとも斬り付けたいさは存じますが、何分相手は腕の達者なばかりではございませず、御家老のお氣に入りでござりますが爲め、迂濶に近寄ることも出來ませず丁度四年のあひだ、怨を呑んでをりまする、然るにこのたび承まはりますれば大先生には明日其奴とお仕合ひをなさるさうでござりますので、願へることでございますれば私しに代りまして主人の敵をぞうぞお打ち殺して頂きたう存じまする、「フム、これは容易ならぬことであるから、此方の一存では何うともできぬが、して其方の姓名と敵とやらは何者だ、「へッ、私しは以前御當家の師範役でございました村田寛太夫の仲間武平さまをする者でございます、お話しいたせば長うございますが」と涙まじりに語つた要領は、同人事

は永年尾州家の師範役として仕へてをつたところ、四年以前に家老の石崎嘉門の許へある傳手をもつて頼つてきた浪人があつた、ところが性來阿諂を悦こぶ石崎、かれて廉潔の寛太夫を快よく思ふてをらぬ折柄なので、その浪人、多少武道のあるを幸ひとしてこれを寛太夫に代らしめ、師範役に推擧しやうとしたのである、で義直公へいろ〳〵言上した結果、兎に角寛太夫と御前において技量を鬪はすことゝなつたが、風來の浪人、元より寛太夫の敵ではないことは家老もすでに認めてをるから、卑怯にも其前夜、竊かに浪人を寛太夫の邸に忍びこませ、飛び道具をもつて擊ち殺さうとした、が幸ひにその彈丸は脚部を貫ぬいたに留まつて生命には別條なかつた、けれどもそれがため爾來御役を勤めることも出來ず、浪人として今は食ふや食はずになるに引きかへ、相手は寛太夫の後を引き次ぎ石崎を後楯に取つて日の出の勢ひをもつて、奉公をしてをる、尤も相手の盛へるを別に妬むといふのではないが、何不自由なく暮

された主人が見る影もなく零落し、其日のことにすら困るやうになられたのは、畢竟彼の浪人の爲めであるから及ばずながら是非敵として報ゆるところありたいと云ふことであつた、源十郎はこれを聞て「フム、卑しき下郎に似合はぬ志し、して其方の主人とは今尙壯健でをられるか、「ヘッ、壯健なれば別に心配もございませぬが其傷が元となつて、いまにも六ケ敷御容体、と申しまして醫者にかけるに藥の代はございませず、漸やく私しが毎日の按摩稼ぎによつて細々の煙を立てゝをりますやうな譯で……、「どうも聞けば聞く程氣の毒な身の上である……して浪人とはなんといふ姓名だ、またそれが其方主人を擊たといふ慥かな證據があるか、「ヘエ、その浪人はたゞいま師範役をしてをります吉村大八といふ奴で……證據と申しますと……左樣でございます……そのとき私しが其奴を慥かに見届ましたので……、「見届た……それだけなれば別に證據とならんではないか、どうして見届けた、「ヘッ、物音に吃驚しまして其

塲へ駈けつけますと、主人は厠へでもお越しになりましたか手水鉢のところに倒れてをられました、それで御介抱をしやうと思ひますと月明りに塀を乘りこゑて逃げて行く奴がございます、さては主人の敵と思ひましたから怖はさも忘れまして、裏口からソッと其後をつけてまいりますれば遠くもあらぬ御家老のお邸へ這入りました、「それだけか、外に證據となるべき品物でもないか、「ヘエ別にそんなものはございません、「どうもそれでは確かに吉村であると申せぬではないか、何か其際落したものを拾つたとか又た外に間違ひのない證據でもあつたとすれば兎に角、其行き先きを見たゞけでは先生に話しも出來かねる、「けれども落ちてございました品物より私しが確かに見ましたのでございますから是れに間違ひのないことはございません、「イヤ〳〵、話しをきけば氣の毒であるが、どうもそれではお聞き入れはなからう、ことに御前においての試合であればどうも六ツケ敷いな、「ヘエ！、それではどうしてもお聞き

入れはございませんか、「フム、切角であるがあきらめるがよかろう、「モシ御情けでございます、どうありませうとも、一應大先生にお傳へを願ひます私しも此のことをお聞き入れくださられば最早お願ひいたしまする方もございませぬ、一生敵を討つ機會がございませぬ、それでは御主人の手前生きてはをれませぬによつて何うぞお取り次ぎを願ひまする」とついに大聲揚げて泣きだす始末に源十郎は持て餘した、でいろ〳〵賺して歸へそうとして居るをりからズーッと襖の影から姿をだした重兵衛「源十郎、其方も敵を持つ身ではないか、すこしは察してやれ、ことに親の敵といふではなく、いはば一季半季仲間の身をもつて主人の敵を討たうとは感心の至りである、武平とやら予は重兵衛ぢや委細の話しは彼れにて聞たぞ、まづ庭へ廻れこゝでは話しも出來かねる、「へエ〳〵、これは大先生様でございますか、私しは以前……、「イヤ〳〵それには及ばぬ兎もあれ庭に廻るよう……源十郎案内いたしてやれ、「ハッ、

これ武平とやらこれへ參れ、「へッ、有り難ふございます」

重兵衛は居間に通ると武平は源十郎の案内によつて庭前にまはり、敷居の上に蹲まつて頭も得あげぬ、こゝで更ためて其話しを聞た重兵衛、思はず感情にうたれて暫らく無言であつたが、やがて源十郎に語つた「源十郎、「ハッ、「まだ武道は廢らぬな、「ハ〜ッ」「わづか仲間の身をもつて斯くまでも主人のためを思ふの情、まことに不憫であるの、「御意にござります、「フ〜ーム……こりや武平とやら、「へッ、「其方はなにか、假令身を捨て〜も主人の敵を討ちたいか、「そりやもう一太刀でも敵さへ斬れましたら死んでも厭ひませぬ「左程決心をいたして居れば予が敵を取つてやるぞ、「エ〜ッ、それでは大先生には……アッ、あり難ふ存じまする、「ア、コレ〳〵明日は望みの通り敵を取つてやるが、たゞいま其方の生命を貰ふがよいか、「へッ、間違ひなく吉村をお討ち下さいますれば何ん時なりとも私しの身躰は差上げまする……ア、しか

し大先生いま一つお願ひがございます、「何事でさる、「へエ、その……まこと に申し兼ねますが、私しの生命を差上げました後は主人を養なふ者がございませぬ、つきましては明日敵をお討ちくだされた上、もし御願ひ出來まするようなれば御上へ宜敷お取りなし頂だきまして主人の身の上を立ち行くように計らひを願ひたう存じますが……、「オヽ、よくも氣が付いた、いかにも望みの通り計ろうて遣はす、「へッ、でございますか、有り難ふ存じます、夫れさへ願ひますれば心殘りはございませぬ、どうか何時なりとも生命は差しあげまする、「よい覺悟じや……源十郎、用意をいたせ、「ハッ」

源十郎は弦を取つて武平を其上に座らせ、切り水を手桶に滿たして用意をする間に重兵衛は庭に下りたつた、やがて大刀の鞘をスラリと放すと、源十郎は杓に水を汲み取つて其上に注ぐ、それをサッと水振ひしたのち、キット武平に目を注げば、すでに大悟徹底したか、三尺の後ろに其首を呑み終ろうとする白

刃の横たはるを知らぬもの〻ように、瞑目合掌してすこしも惡びれた樣もないこれを見た源十郎も默然としてをる、重兵衛も一言も發せぬ、しばらくは塘を急ぐ鴉の聲が際立つて聞へるのみであつた。

○師範役では無いあれは藁人形だ

稍あつてのち、重兵衛の口から突如として洩れた「武平、天晴である、最早よいぞ」といふ聲と共に拔いた刀は袖をもつて拭はれ、チヤリンと鍔音はげしく鞘に納められた「たゞいまより其方の生命は此方の物であるぞ、イヤ命だけではない魂も此方の物であるがよいか、「へエーッ」

武平は身の恙がないのを悅こぶよりも寧ろ呆れた「わッ、私しの生命は……

ドッ、どうなりましたので……、「なんでもよい、今後は此方の生命であれば凡て申す通りに聞けばよい、「へエー……、「ついては明日試合の場所へ此方

の供をいたしてまいれ、「へッ、有り難ふ存じまする、しかし此儘の着物ではまことに恐れ多ふございますが……、「其儀はこれなる源十郎の着換へを取らすによつて心配いたすな、しかし此處で堅くまうし聞けてをくは餘の儀ではない、明日其方の手をもつて吉村を討たしてやる筈であるが……、「アモシ、そりや駄目でございます、相手は何分弱いながらも師範をする程の腕がございますが私しは……、「こりや控へッ、たゞいまより昔しの武平ではないぞ、此方の魂が這入つた武平じや、「へッ、それでも……、「まア聞け、それで斯ようにいたせ、吉村の前へ立つた時は決して恐れてはならぬぞ、相手を師範役だと思へばかならず大切筋に遅れがでる、されば其方の眼中に吉村をみるな、「では目を瞑りまするので、「そうではない、眼を開かれば見當がつかぬではないか、「へエ、しかし吉村を見るなと……、「ハヽヽヽヽ、みるなと申したのは吉村と思ふなと申すことだ、「ではなんと思ひます、「彼奴は人間ではない……

……、「へエ！　元より畜生みたような奴で、「此方の申すことを聞け、「へエ「吉村は人間ではない、此奴ア木偶坊だ、藁人形だと思ふてをれ、「なるほど藁人形……、「そうだ、それで兩方突つ立つたときには、柳生重兵衛の門弟武平、主人の敵覺悟しろッといふ拍子に相手の胸元を一生懸命に突け、「へッナッ、なんで突きますので……、「無論刀で突くのだ、「へエー、ところが私しは刀はございません、尤とも木刀は有りましたが、それも賣つてしまひました、「イヤ〳〵それで心配に及ばぬ、此方から貸してやる、「へッそれも……どうも着物も刀もお借り申しては濟みませんな、「だが刀はその場所で此方から渡してやる、尤も仕合といふことに致して出るのであるから、兩方の突つ立つ場所までは木刀を持つて出るのだ、これもその場所で貸してやる、「どうも濟みません……ですが此方から突いて行きますと藁人形の吉村奴がッとしてをりませうか「無論してはをらぬ、かならず其方の頭を二ッ、三ッは打つでま

らう、しかし木刀だから生命に別状はあるまい、「へー、矢ッ張り打ちますか痛いでせうな馬鹿なことを申すな、たゞいま生命を棄てた其方でないか頭の二ツヤ三ツはなんだ、「へッ、そりやもう大先生に生命を取られますのは尠しも厭ひませんが彼奴に打たれるのは……、「ハッ〳〵〳〵、それでも敵が討てればよからう、そりやそうでございます、それでは明朝出掛けて參りますからどうか宜しふお願ひいたします、「だがくれ〴〵も藁人形を忘れぬようにいたせ、「へェ〳〵決して忘れません、どうも有り難ふ存じます、「アまて〳〵これ一寸待て、「へッ、まだなにか御用が、「これを其方に遣はすから、寛太夫の薬餌を求めて歸れ」と居間に上られ手文庫の中から取りだした小判一兩、武平の手に與へようとすると飛びのいた「メッ、滅相もない、明日はいろ〳〵と貸して頂だいた上、敵を討たして頂だくのですもの私しの方からお禮を差しあげるのは普通でございます、それにこんな澤山なお金を頂戴しましては罰

が當ります、「これは其方の忠義にめで〻天から下さるのじや、決して此方から與へるのではない、持ち歸られば明日の敵討ちは許さぬぞ、「アモシ、そうご怒つて頂だいては困ります……仕方がございません、それでは頂戴いたしますごうも濟みません」と勇み勇んで立ち去る後を見送つた重兵衛「なア源十郎、下郎に似合ぬ感心な奴だ、其方もはやく本望遂げたいであらうな、「ハ〻ッ、なんとな、羨やましい心地がいたします……明日彼の樣なものをお連れになつて不都合はございまんか、「ナーニ、心配いたすな、しかし家老の石崎も怪しからぬ奴であるの、それについて思ひ出すは過日吉村のためを思ふによつて強て立合を見合すよう石崎まで申してやつたが、そんな關係があるために石崎の手前尚更ら廣言を吐いたのであらう、「ハ〻〻〻、へエーッ左樣のことがございましたか、「フム、話しがあつた……ア、しかしいよ〳〵敵を討たすとすると殿まで申し上げてをかればなるまい、これより一寸登城いたすから留守

を頼むぞ、「ハ～ッ、しかし夜中の御登城も御大儀でございませう、御書面でも御認めになりますれば某しまいりまする、「イヤ～～餘事とは違ふ、是非此方がまいられねばなるまい、「ではお早くお歸へりを相待ちまする」

重兵衛がにはかに仕度を整のへて玄關より下りようとする時、火縄の香がプンと鼻をついたので、思はずハッと身を潜めるとたん、ズトンと火蓋を切つた鐵砲の響は四隣を驚ろかした、いましも重兵衛を送り出して敷臺に立つた源十郎、不意の物音に「曲者ッ」と叫んで物色しようとするを「まてッ」と止めた重兵衛、煙をつたふて塀の隅なる木々の茂りに飛びこんだと思ふまもなく、「源十郎、押へッ」と聲諸共にバッと投げた覆面の曲着、宙にモンドリ打つて源十郎の前へドスンと落ちた、見を起しも立てず「畏こまりました」と膝におさへ源十郎は重兵衛のくるを待つてをるところへ、片手に鐵砲を持つた重兵衛慌てた様もなくノソリ～～と歩みよつて、刀の下げ緒を外し「これで縛つて此

方の歸るまで逃がすな、なほ此鐵砲も確と預くるぞ、「畏こまりました、お早くお歸りを待ちまする」といふ言葉を後にうけて悠然と立ち去るあと、源十郎は縛つた曲者を引つ擔いで庭先にはこんで太やかな松の根本に荒縄を添へてかたく繋ぎ、鐵砲は床の間にをいて事もなげに書見をしてをる。

○來た時は曲者、歸る時は味方

源十郎が書見を初めて一時たゝぬ内に重兵衛は歸つてきた「殿の御前上首尾である、寛太夫のことも深くお尋れであつた、察するところ、殿と寛太夫のあいだに雲が懸つてをつた様子、イヤ雲を懸けてをつた奴があつたのだ、しかし此方はこれをことゞゝ、拂ふたから、いづれは彼れの身に花咲く日和もあらうそれは嘸かしお骨折でございました、ついては定めて明日のこともお聞き濟みでございませう、「オ～元よりである、たゞいまより彼れ等に關係のなき家中

の方々にそれ〳〵お申し付けのうへ、何かとお手順をせられるそうである……ウム、しかし先程の曲者は如何いたした、「ハ｜ッ、彼れなる松に繋いでございます、「これへ引け、「ハッ」

源十郎は繋いた縄を解いて、曲者を椽先きに引きすへた「序でに縛つた緒も解いてやれ、定めて窮屈であらう、「ハッ、しかし先生それでは……、「ナニ此方は天下の名人だ、心配いたすな、手向ひいたせば勿論、逃げようといたせば捻り潰すまで、ハッ〳〵〳〵」といふ言葉に緒も解いた源十郎、つゞいて覆面をも外そうとした「アまて、それだけは許してやれ、窮屈ではあらうが取れば反つて迷惑、心方も顔をみれば其儘にはをかぬ、「へエッ、それではお助けになる御考がへで、「まア默つてをれ、助ける助けぬは此方では解らぬ、「へ｜、それでは覆面を剝いてセメテ面だけなりとも……、「待て〳〵、其者の存念を聞た上で定めるぞ……こりや其方は定めて家中の者であらうが、ふかく

は尋れんによつて、たゞ此方の聞くことゞもを包まず申せ」

重兵衛の言葉はすこぶる穏やかであつた、しかしこの穏やかなだけ反つて曲者の良心を剜ることが深かつたらしい、最初松から解かれた時、繋がれた緒の解いた時までは充分反抗の色があつたる重兵衛、源十郎の威勢に恐れてをつた爲め、迂濶に現はさなんだとはいへ、一分の隙もあれば敵はぬまでも何れかへ飛びかゝつて倒されば已まんといふ体は、覆面に半ば隠された凄い眼が無言の裡に語つてをつたが、いま重兵衛の言葉によつてそれも何時しか安堵の色とかわり、態度もにはかに和らいだ、今迄は引き据へられたまゝ片膝を立て、兩の肩を怒らしてあつたのが、たちまち兩足を揃へ、頭さへ下げはじめた、この樣子を見た重兵衛、一層聲に力をいれて「どうしや包まず申すか、返答によつて此方も考がへがある」といふ言葉に今は答へもせずにをられぬらしい、「ハ｜ッ、まことに相濟みませぬ、「イヤ〳〵、其方もつれ〳〵恩義のあるものよ

り頼まれ、それに酬ひるために生命を捨てる決心をもつて致したことであろう人間は恩に酬ゆることは大切だ、流石は尾州家の家中だけあつて立派な心掛じや、重兵衛ほと〳〵感心いたしたぞ、「恐れいりまする、「しかしだ、ものには大小あるぞ、大のために盡くさればならぬ場合には、假令如何程の恩義ありとも小のものに報ゆることが出來ぬぞ、よく考がへみよ、誰れしも父母より受けた恩愛は海山よりも大きいが、萬一主君の御身にことがあれば其大きい恩愛のある父母を棄てればなるまい、イヤ棄てるだけではない、場合によれば見殺しにせねばならぬものじや、また物事には善惡の二道あろ、いかに恩愛のためとは申せみす〳〵惡事と知つて助けるは馬鹿者の骨頂だ、また如何程恨みのある者なりとも、善事に盡すと見てこれを扶けるは賢の最とも大なる者であるぞ解つたか、「ハヽツ、恐れいりまする、「ところで其方は此方を善人とみるか惡人とみるかツ、「ド、どうも相濟みませぬ、まことに心得違いをいたました

「ハツ〳〵、解つたらばよい、ところで其方も恩に酬ゆると思ふ精神あれば、此方の尋れることについて返答いたすは心苦しく忠ふであらう、されば口をもつて答へよとはいはぬ、たゞ首を振つて言葉に代へよ、「ハヽツ、なにかと穩やかなるお言葉、こと〳〵く肝に命じましてござりまする、つきましてはお尋れの箇條、如何なることかは存じませんが、前刻來のお言葉によりまして某しは小の恩義を棄てまする、惡の道を避けまする、決して御懸念には及びませぬ、如何なることなりともお尋れになりまして存じたることなれば明瞭に御答へ仕つりまする、のみならず今晩無禮をいたしましたる條々、御尋れなくとも申し上げまする、「フム、よく心を改められた、此方が尋れようと思ふのはそれだ、しかし大体は察してゐる、なれ共更ためて聞くのであるから詳しくいふに及ばぬ、なほ其方に申し付けたものは二人あるであらう、「ハツ、それでは既に御承知にござりますか如何にも御家……、「ア待て、二人の姓名を

まうすな、「ハッ、「其内小の方だけでよいぞ、大は決して口外いたすな、「ハ〜ッ、恐れいりまする、「しからば申してみよ、「ハ〜ッ、實は今日其……大……の方の御邸へ俄かに招かれて參りましたるところ、御師範役吉村殿も御座にゐられ、某しにお手厚き御馳走を給はりましたる後……その……大の方が戸棚より前刻の鐵砲をお取りだしになり、これを以て今宵貴君を一發の下にお仕止めまうせ、首尾よくまいらば當座の褒美といたして金子百兩を遣はし、なほ御前体をよしなに取り計ろふ……この仰せにござりました、「ナニ、御前体よしなに取り計ろふ……フム、さては權勢を笠に政道を紊す奴だな、最早それ聞く上は許すこと相成らん、「ハ〜ッ、恐れいりまする、「アーコリヤ〳〵其方ではない安心いたせ、此上は念のため聞くが、たゞいまの大と申したのは石崎であらうの、「御意にございまする、「フム、なほ序ながら今一ッ尋ねるが今より四年以前、先の師範役村田寛太夫を討つたのも其方であらう、「ヘエッ、

それをどうして御存じで、「いさゝか仔細あつて存じてをる、其節も矢張り兩名から頼まれたか、「ハ〜ッ、まことに相濟みません、「フム、併しこれだけ聞けば用はない、許すによつて歸れ、尤とも鐵砲は此方に預かりおくぞ、「ハ〜ッ、御宥大なるお言葉、なんともお受けの申し様もございません、なほ只今の儀につきまして御用の節は何時なりとも罷りいでまする、某し姓名は……、「こりや、それを申すことならぬ、此方は其方の顔もみれば姓名も知らぬ、何事も申すな、はやく歸れ、「ハ〜ッ」きた時の曲者は歸る時すでに味方となつて悦こんで立ちさつた。

さてその翌朝、まだ重兵衛も源十郎も寢床から離れぬうち、下男は源十郎の枕計へ駈けつけた「モシ鈴木様、大變でございます、「ナニッ大變なんだ」と思はず飛び起きた「一体どうしたんだ、「ヘッ、昨日の男が氣を違ひましたか變なことを申してまいりました、「ナニ昨日の男……フ〜酒くろしい風体の

者か氣が違ふた、可愛想に一時に嬉しさがコミ上げたのだ暴れてをるか、「別に暴れてはをりませんが、なんでも藁人形を突いてやるのだ、ソレこの通りなぞと申して私しが御門を開けます拍子に此胸を突きましたものですから思はず尻餅をつきました、氣違ひ力と申しますが大變な力でございます、「そりや不憫だまて〳〵拙者がすぐに參るから、「ヘッ」と下男の立ち去つた後で身の廻りを調のへ、玄關へ出てみると、武平は拳を固めて一心に立木の幹を突いてをる樣子、さては少々逆上したかと「武平、コレ武平」と二聲三聲掛けたのが耳に入つたかフト此方を向いた武平、さつそく飛んできて源十郎の前に平伏した「ヤッ、これは小先生、昨日はいろ〳〵とあり難ふ存じまする、お蔭で主人に御藥か差し上げることも出來まして主人も非常に悦こんでをりまする、また今日もあり難ふ存じます、お蔭で四年越に腹の虫が下がりました、「フム……どうも判らん、「モシ小先生、何か判りません、なにか御紛失物でございます

か、「イヤ〳〵別に紛失物ではないか……汝夫れが正氣か、「どうもそんな事を仰言ては困ります、私しは今日正氣もの〳〵現金掛直なしといふ正氣でございます今日は武平一生一代の晴の場所でございます藁の人形をポーンと突きまさ昨晩なぞは寢ずに稽古をいたしました、ヘッ丁度裏の土塀を三ケ所穴をあけましたぜ、この通り拳が大分固まりました、「ハ、、、、、、正氣なればよいが、今下男がまうすには門の明けるのを待ちかれ、變なことを申して飛び込みさま胸を突かれたさやら、それで汝が氣が違つてをると申してまいつたが、「へ〜い〜い、そりや大變な間違でございます、何分にも寢ずに稽古いたしました此の拳でございますから、使ひ初め早々吉村なぞにやるのは胸糞惡ふございますので、一寸初物を御祝儀に差上げましたので、「ハ、、、、、、そんな初物は誰れが悦こぶものか、「ですが私しは嬉しふございました藁人形といふ機會にポンと突きますと、コロッ〳〵と二度轉つた樣は氣持が宜しございました、

「しかしそんなものを稽古したところで仕方があるまい、刀を持つてそれで突くのだから、「エーッ、そうでしたな……が萬一刀を持つ間がなかつたらば是れでやつてやりゝす、ナーニ大丈夫、相手は何分にも藁人形ですから」と昨日のありさまに引き代へて大層な勢ほひ、そのうちに重兵衛が起きて來るのをみて「これは大先生、昨日はいろ〳〵有り難ふござりました、御蔭で主人も大層なよろこび、また久しぶりで御藥りを差上げることも出來ました、「フム、それは悦こばしい、しかし其方は今日充分やられぬぞ、昨夜殿の方へもお話しを申し上げてをいたから懸念いたすな、もし又吉村の外に門人共が加勢いたすような事があれば役人達が防ぐ筈であるが此方も支へてやる、「エーッ殿様へまで御話し頂だきましたか、どうも御禮の申しようもございません、「それ程であるから其方もシツカリやられればいかぬぞ、どうじや昨日教へたことを忘れはいたさぬか、「ヘッ、藁人形でございますか、ナーニ忘れるものです

か昨夜も寢ずにドスンと稽古をしましたので裏の土塀を三所突きやぶつた程でござります、それから今朝御門のところで御祝儀にお取り次ぎの方へ進呈しますと、二度も氣味よふ尊がつた程でございますから大丈夫、「ハッ〳〵〳〵、しかしまだ朝飯は濟むまい、源十郎彼れに充分喰してやれ、「アモシ〳〵、此上御厄介になつては罰が當ります、一度や二度頂だかなんだところで生命に別條ありません、「馬鹿なことを申すな、腹が空いては充分に敵を討つことができぬぞ、「エッ、眞誠でございますか、それでは勿体なうございますが頂戴いたします」

○五十人くらいは何だ

武平に朝食をあたへ、源十郎の古着を着せ大小を差させてなにかと準備をして居るうち、おい〳〵時刻に向ふたので、重兵衛には何くれとなく心得をい

ひ聞かせ、やがて門人さいふ格で連らつて城内の馬場へ通ると四方に幔幕を引きめぐらし、大守の着座席は一段高く、紫地に葵の御紋付いたのを霞に引き絞り、重役席は其隣りに、其他家中の拜觀席、支度席等隙間もなく桟敷を組まれてある、武平はこの樣をみて只だウロ〳〵としてをるのを重兵衛はいろ〳〵心を勵まし勇氣をつけて設けの控所に入つた、やがて第一の太鼓が鳴りひびくと、大守はお出ましになつて着座せられる、つゞいて一体の家臣が席につく暫らくあつて、第二の太鼓が鳴り渉つた、このとき重兵衛には「武平、其方の出るのは一番終りであるから夫れまでは決して騒いではならぬぞ、たゞ此處にジツと待つてをれ、もし中途で騒ぐようなことがあれば其方の望みは遂げぬからよいな、「へエ〳〵、大先生のお言葉は少しも背きません、それでは私しの出る番にはどうぞお知らせを願ひまする、「よし〳〵、何れ相圖をいたしてやる最早時刻であるから此方はこれから出るぞ、「へツ、どうぞ彼奴が出ましたら

思ひさま打つて頂だきたいもので、「此方の旨にある默つてをれ、「へツ」

はじめて壯大な設備をみた武平、氣はウロ〳〵してをつたが程なくそれも靜まつたと思へば、今度は嬉しいような恐いような氣が湧いてウロ〳〵してをる樣子、重兵衛は早くもそれを察していろ〳〵と氣を落ちつかせ、自分は試合の時刻が迫つたので仕度をして城内に罷りでた、相手は家中の若侍ひで相當にできる方だが元より重兵衛に勝てる筈がない、が流石は重兵衛たゞちには勝たぬ暫らくは花を持たして御面をとろ、これで暫らくの休憩がちつてまた二人目がでる、これも御面を取つて又もや休憩する、こんな風で九人までは無事に勝劣をつけて十人目は師範役の吉村がでた、控へ所にあつて是れをみた武平、おもはず藁人形と叫ぼうとしたがホツと重兵衛からいはれた言葉を思ひだして僅かに口のうちで嚙み殺し、手を握つて勝劣を見てをる、が吉村は元より重兵衛の敵ではない、で重兵衛は只一打ちと思ふたがしかし兼ねて石崎から彼れに傳へ

しめた言葉を多させぬのみか、卑怯にも昨夜のことがあり、かつは武平の一件があるから充分に疲らした上で打ち据へようと考がへたのであるから容易には勝をとらぬ、意地悪く彼方此方とキリ〳〵舞ひをさせたのち、嗚づかひの苦しそうになつたのを見て、上段に振り翳した太刀に充分の力をこめ、「エイッ」とばかりに打ち下したのが、吉村の胸天へシタ〳〵カにポンと當つたので、アッともスッともいふ間もなく、そのまゝ其場に氣絶をしてしまふた、この体をみて驚ろいたのは家老の石崎および服心の門弟だけではない、此方の武平もおどろいた「オヤ〳〵流石は大先生だ、豪いものだがしかし殺してしまふては薩ッ張り樂しみがない、こいッア酷いことをすると」ボヤイてゐる、そのうちに重兵衛が這入つてきた「大先生様、藁人形殺しては私しはサッパリ張り合ひがございませんが、何ういたしませう、「ハいいいい、心配いたすな一時目を廻したゞけだ今に蘇生るぞ、それよりも今にお辨當が下がるから、それを食つて

待つてゐれ、この次ぎが其方の番だ、「へエッ、左様でございますか有り難ふ存じます」

重兵衛の言葉に武平は今更ながら躍り揚がつて悦こんでゐる、そのうち辨當が下げられた、程なく合圖の太鼓が鳴りひびく、これによつて重兵衛は身のまわり殊更ら甲斐々々しく扮でたつて進んだ、今度は太守はじめ家臣が待ち構へてゐる勝負で單身の重兵衛が五十名の大數に當らうとするのである、みれば五十名の人々、いづれも頭上に印板を結ひつけてあつて、これを破られたならば既に死者同様、戰鬪すべき力がないものだ、重兵衛も同じく付けられてゐる、やがて第二の太鼓が鳴つた、これによつて五十人の大勢、隊伍をそろへて場の中央におし寄せる、これを目がけて重兵衛はパッと飛びこんだ、見物の人々は互ひに汗を握つてアナヤとこれを見てゐる事幾許もなく、たちまち其内から十人、十五人の落伍者は列外に省き出されたが、重兵衛は相かはらず健在に

竹刀の音がますく激しい計りで今に出てくる樣子もない、其内に又もや十數名の落伍者が現はれる、引續いてまた七八名、又もや數名といふ風に今は殘るところ五指にも足らぬ程、しかも夫れ等の板の完たいものは一人もない、側の缺けたるもの破れ目の入つたもの等で、凡て一回二回の太刀を受けた痕を止めてゐる、太守ははるかにこれを見られて近侍のものに何か仰せられる、近侍は城内に進んでこれを大聲で傳へた「最早勝負見へた双方共止まれ、尙殿のお好によつて師範役吉村氏と柳生重兵衛御門弟と番外の立ちあひを仰せつける双方支度整ふたならば直ちに出ますよう、又たこの勝負には特に柳生殿御見分役を許されたれば然るべく取り計らはれよ」

この聲に「ハ～ッ」と一禮した重兵衛、吉村の控へ所をみると突然の下命に慌てたが數名の門人が寄つて集つて俄かに支度をしてゐる樣子、つぎに武平はと見ればこれは案外、ポカンと此方をみたまゝ呆れて立つてゐる樣に、ツカツ

かと進む寄つた「これ武平、はやく支度をせんか、「へッ、いやもう大先生樣、どうも豪らい者でございますな、「アリヤ矢ッ張り藁人形の流儀で……、「何がだ、「へッ、たゞいまのお仕合でございます、よくあれだけの人數なお相手になされてお疲れが出んものでございますな、「ナイく、其處どこではないぞ、今度は其方だ、はやく支度をせんか、「へッ、何んでございます、「何んでじやない、其方がでるのじや、「へエッ、藁人形でございますか、待つてゐました、どうも有り難ふございます」とそのまゝバタくと飛び出そうとする「コレく、其まゝでは不可ぬ、はやく支度をせんか、「支度……一体どうしますので……、「その着物を脱いでこれと着代へるのだ、「へエーこんな雜巾のようなものを着るのでございますか……どうぞ願へますれば此儘で……、「さア其方の申す通りいたしてもよいが、それでは働らき惡いぞ、こんなもの着てゐれば充分に望みを遂げることば出來まい、御前であるから其まゝで

出ればならぬのであるが、特に此方の許らひによつてそれを御許し頂だいたのであるぞ、「へーー、そうでございますか、それでは着代へます」とさつそく稽古着と着代へた「さア、それを着代へたらば是れを持て、「へッ、オーこりや刀の風に樫の棒でございますな、こりや面白い、これで藁人形をブスッとやるんですな、「コレ〳〵、左様な大きい聲を出してはいけぬ、兎に角これを向ふまで持つてゆけ、よい頃を見記ろうと刀と代へて遣はす。「へッ、刀より此の方が危なげなふて結構でございます、これでブスッ、バタリとやつて見ますから、「まア兎に角彼れへでバ此方がついてゐてやる、「へッ、どうもいろ〳〵有り難ふ存じます」

丸で捕りたての猿を町へ追ひいれたように、重兵衛の後ろについて、キヨロ〳〵見まはしながら漸やく中央まで進んだ、みると吉村は支度を調のへて既に立つてゐる、これを目にした武平、最早重兵衛の言葉も、仕合の相圖も耳には

いらぬ、たゞ一心に吉村の胸を見つめてゐつたが、にはかに聲をだした「柳生重兵衛大先生様の一夜の弟子、武平が御主人様の敵打ちだ覺悟しやがれ」と聲をだしたので重兵衛も面喰つた「コレ武平、まだ早い、まて」といはふとする折柄、木刀の先を眞ッ直に前へ出して、今しも突然の言葉に呆れてゐつた吉村の胸先目がけ「ウヌ藁人形めッ」と一聲、いふがはやいか滿身の力をこめサッと倒れかゝらんばかりにッと突くと、胸の狙ひは聊さか上になつてその咽元にドッと當つたが、武術の素養もなければ元より手の冴へもない武平ではあるけれども一心籠つた太刀先は木刀とても馬鹿にはできない、重兵衛もハッとみると、其先一二寸は咽笛にブスリと突きいつた、流石の吉村も一言の言葉もなく見る〳〵ドッと倒れた、武平もこれには自分ながらアッケなかつたらしい「大先生様此奴が寢ましたが、どうしませう、「どうも斯うもない、もう死んだのだ、「へーエ、眞ですか、なんだ馬鹿らしい……それなれば大先生様

が胸元を突けと仰言たが、よく喉を突いたものでございますな、もし胸元だつたら何うで私しの頭を三ツ四ツ打つところであつたのでせう、「イヤ〳〵慣れぬうちは胸元を突けば喉、喉を突けば顔へ當たるものだ、「へーン」

本人の武平ですら呆れた程だから、みてをつた家中のめん〳〵は無論あきれた、あきれた中に吉村先生、癪癇を起したとか或ひは卒中で死んだと云ふ者もあつた程、太守も棧敷に居つて何がなんだか判らぬ、たゞちに近侍のものに命じて尋ねさせようとする處へ重兵衛がみへて委細の話しを言上したのち「相圖のない間に敵を倒したのは畢竟下郎の身で委しくそのことを存ぜぬためであれば」と申しあげると明敏な太守は強てそのことを咎めず、只だ武平のその忠義を賞せられたのみか、寛太夫の全快をまつて村田家再興のことをさへ申し聞けらるゝに至つた。

○政道を紊す逆賊

思ひの外の面目を身に施こし、萬々の御禮を述べて退らうとするとき、重役席の一隅から聲があつた「誰れがある、仕合の法則に悖り上を蔑がしろにする痴者に縄打てツ」と嚴そかにいふ聲に、重兵衛はフイトみると家老の石崎であつたから、隙さず聲をかけた「恐れ多くも尾州家を紊さんとする逆賊、先には家臣に申しつけ村田師範役を擊たしめ、昨夜はまた卑怯にも此方を狙擊いたさせたな、されども天下の名人柳生重兵衛は汝等ごとき逆賊の筒先きに倒れるものではないぞツ」大喝したので太守の耳にも是れがはいつた「重兵衛、一寸まいれ、「ハ〜ツ、今聞きおよぶに昨夜其方を擊ち取らうといたした者あるは趣むき、まことか、「ハ〜ツ御前へ出仕の節某しの玄關先にて、「怪しからぬ奴だ、何者である、「ハ〜ツ、狙擊いたしましたる者は罪はございません、

なれごもこれを申し付けたるもの、これが首尾よく成し遂げまするれば恐れながら御前体をよしなに計らふと申したるやに聞きおよびまする、かゝることを致すものが御前体によろしくお取りなしをいたさば、家臣は漸次に彼れの命に從がひ、ついには一國の御政道にまで其煩を及ぼすは明らかと存じまする、「フゝム怪しからぬ奴だ、自体何者じや」と重役席をジロリとみられると、石崎はおもはず顏色をかへて縮み上つた、このとき家臣席の一隅から飛び出した者がある、ツカ〳〵と太守のたられる棧敷下まで駈けよつて平伏した「ハゝツ、申しあげまする、「オゝ其方は阿部ではないか何事である、「ハゝツ、たゞいま柳生先生の仰せられました儀につき某しより言上いたしまする、「ナニ、其方は此儀について存じたると申すか、「ハツ、實は或者の命により昨夜先生を擊たふといたしましたは某しでござりまする、「ナニツ、其方が重兵衛を擊たふといたしたツ、たわけ者めツ、「ハツ、まことに重々の心得ちがひ申し譯ご

いませぬ、しかるに放ちたる彈丸はさひはひ先生に當らず、某しは引ツ捕へられました、「重兵衛は定めて立腹いたしたらうが、其方よく無事にをつたの、「ハツ、ところが先生の御寛大なる御處、置某しの覆面もお外しなく、姓名もお尋れなきのみか、樣々の御教訓さへお聞かせ頂だき、前非を悔ひましてございまする、「フム重兵衛が許したとあれば此方もふかく咎めぬにより、其方に申しつけたる者の姓名および其の儀について申すところあれば語れ、「ハツ」ところゝで石崎、吉村のことから村田を討つたことまで落もなく言上すると、公には非常の御立腹で其場を去らせず石崎を處分せられ重兵衛に其眼識に乏しかつたことを詫び、且つはその撿擧した勞を犒らはれて何日までも滯在するようとのお言葉も下がつたが、何分にも秘密とはいへ重大の御用を持つてをる身、何日までも滯在してをる譯にはならぬ、で或日公の御機嫌麗はしき日をみて御暇をねがひ、ふたゝび源十郎を供に連れて宮宿から桑名へ渡られ、伊勢參詣

を濟まして故郷の大和路へ入り、それから廻つて京都見物に數日を費やされ、次ぎに浪華の都に足を止めたのが、偶然にも源十郎の敵、早川典膳の手がゝりを得る種となつて、これから中國地を漫遊せられる途中、周防の錦帶橋において首尾よく仇を報はせ、九州地の漫遊には島津、細川、鍋嶋の三侯を驚ろかす話しもあるが、本編は東海道の漫遊を主さしたものであるから、他は稿を改めて筆を執ることゝする。

柳生重兵衛旅日記 終

明治四十四年十月十五日印刷
明治四十四年十月二十日發行

(定價金貳拾五錢)

不許複製

述者　野花散人　大阪市東區博勞町四丁目十三番地
發行者　立川熊次郎　大阪市東區博勞町一丁目一番地
印刷者　蒲田德之助

發行元　大阪市東區心齋橋筋博勞町北
書籍出版業　立川文明堂
電話南三〇九四番
振替口座大阪一四六一番

立川文庫發行目錄

定價各貳拾五錢　郵稅六錢

諸國漫遊 一休禪師
諸國漫遊 水戸黃門
頓智奇談 大久保彥左衛門
伊賀水月 荒木又右衛門
智謀 眞田幸村
豪傑 岩見重太郎
諸國漫遊 最明寺時賴
諸國漫遊 太閤と曾呂利
諸國漫遊 宮本武藏
豪傑 後藤又兵衛
太閤記卷の一 木下藤吉郎
柳生重兵衛旅日記
西鄕隆盛
塚原卜傳

立川文庫發行目錄

諸國漫遊 一休禪師太閤ニ會呂利
諸國漫遊 水戸黄門 由利漫遊 宮本武藏
頓智奇談 大久保彦左衛門 俠客傳 後藤又兵衛
伊賀水月 荒木又右衛門 太閤記 木下藤吉郎
智謀 眞田幸村 俠客傳 佛生重兵衛旅日記
諸國漫遊 日蓮明寺時賴 塚原卜傳

定價弁貳拾五錢 郵稅六錢

△文明堂發行目錄▽

小宮水心註 註解日本外史 新版 定價 壹圓五錢
川原閑舟編 最近調査 市町村便覽 新版 定價 八拾錢
文明堂編輯 改正 日本法律全書 新版 總皮 定價壹圓拾錢 總クロス 定價七拾錢
同 簡珍輕便 改正日本六法完 總皮 定價八拾錢 總クロス 定價參拾八錢
同 民法 定價 拾七錢
同 商法 定價 拾七錢
同 刑法 定價 拾七錢

文明堂編輯 稅法 定價拾七錢

同 市町村制 定價拾七錢

同 民事訴訟法 定價拾七錢

法典講習會著 言文一致 刑法註釋 定價拾七錢

同 改正 刑法問答講義 定價五拾錢

大野雲潭著 老莊講義 新版 定價參圓

小宮水心著 思想交換 美文的書翰文 定價六拾錢

同 二十世紀 新論文 定價六拾錢

同 思想交換 美文的新書翰 定價六拾錢

鈴木撫水著 新撰 日用書簡文 定價貳拾五錢

日用書簡文 定價參拾錢

同 落花流水 戀的候文 定價參拾錢

同 葉書小品 落花片々 定價參拾錢

渚遊山人著 作文良材 遊紀文 定價參拾錢

香夢迷仙著 花笑柳媚 美人千姿 定價參拾錢

紫雲山人著 新体詩編 おもひで 定價參拾錢

幸田紫朗著 作文良材 美文之海 定價參拾錢

川原閑舟著 俳句と川柳 定價參拾錢

楓葉散史著 新撰 祝辭演說大成 一 定價四拾五錢

園部紫嬌著 講話資料 新お伽百話 一 定價參拾五錢

西垣堯則著 新譯 イソップ物語 二百話 一 定價六拾錢

同 品性修養人格鍛練 格言教訓全書 一 定價六拾錢

楓葉散史著 青年立志修養編 一 定價參拾五錢

大阪物理學校 數學公式 定價四拾錢

同 新撰 算術講義 並ニ例題精解 定價壹圓八十錢

數學專攻會 普通教育 實用新算術 並ニ例題精解 定價七拾錢

同 普通教育 實用新算術 定價參拾五錢

研數學館著 普通教育 珠算獨習全書 定價參拾五錢

同 珠算新書 定價貳拾錢

英語研究會著 二十世紀 日英手紙文 定價五拾錢

元木貞雄著 英和新會話 定價五拾錢

英語研究會著 英語 いろは引單語會話 定價 貳拾五錢

玉田玉秀齋述 水戸黄門 諸國漫遊記 新版一 定價 四拾錢

加藤玉秀述 武士道 櫻化 荒木又右衛門 新版一 定價 四拾錢

廣澤虎吉述 雪曙實錄 義士銘々傳一編 新版一 定價 四拾錢

報效會著 一一宮尊德一 定價 參拾錢

十返舍一九著 校訂 東海道中膝栗毛一 定價 六拾錢

加藤玉秀述 立川文庫第一編 一休禪師 定價 貳拾五錢

同 立川文庫第二編 水戸黄門 定價 貳拾五錢

立川文庫一編 諸國漫遊 一休禪師 定價 貳拾五錢

立川文庫二編 諸國漫遊 水戸黄門 定價 貳拾五錢

立川文庫三編 頓智奇談 大久保彦左衛門 定價 貳拾五錢

立川文庫四編 伊賀水月 荒木又右衛門 定價 貳拾五錢

立川文庫五編 智謀 眞田幸村 定價 貳拾五錢

立川文庫六編 豪傑 岩見重太郎 定價 貳拾五錢

立川文庫七編 諸國漫遊 最明寺時賴 定價 貳拾五錢

立川文庫八編 頓智奇談 太閤と曾呂利 定價 貳拾五錢

立川文庫九編 豪傑 宮本武藏 定價 貳拾五錢

立川文庫 豪傑 第十編 後藤又兵衛 定價貳拾五錢

立川文庫 絶島奇談 第十一編 新譯ロビンソン漂流記 定價貳拾五錢

立川文庫 天下之偉人 第十二編 太閤秀吉 定價貳拾五錢

立川文庫 武士道精華 第十三編 堀部安兵衛 定價貳拾五錢

立川文庫 第十四編 柳生重兵衛旅日記 定價貳拾五錢

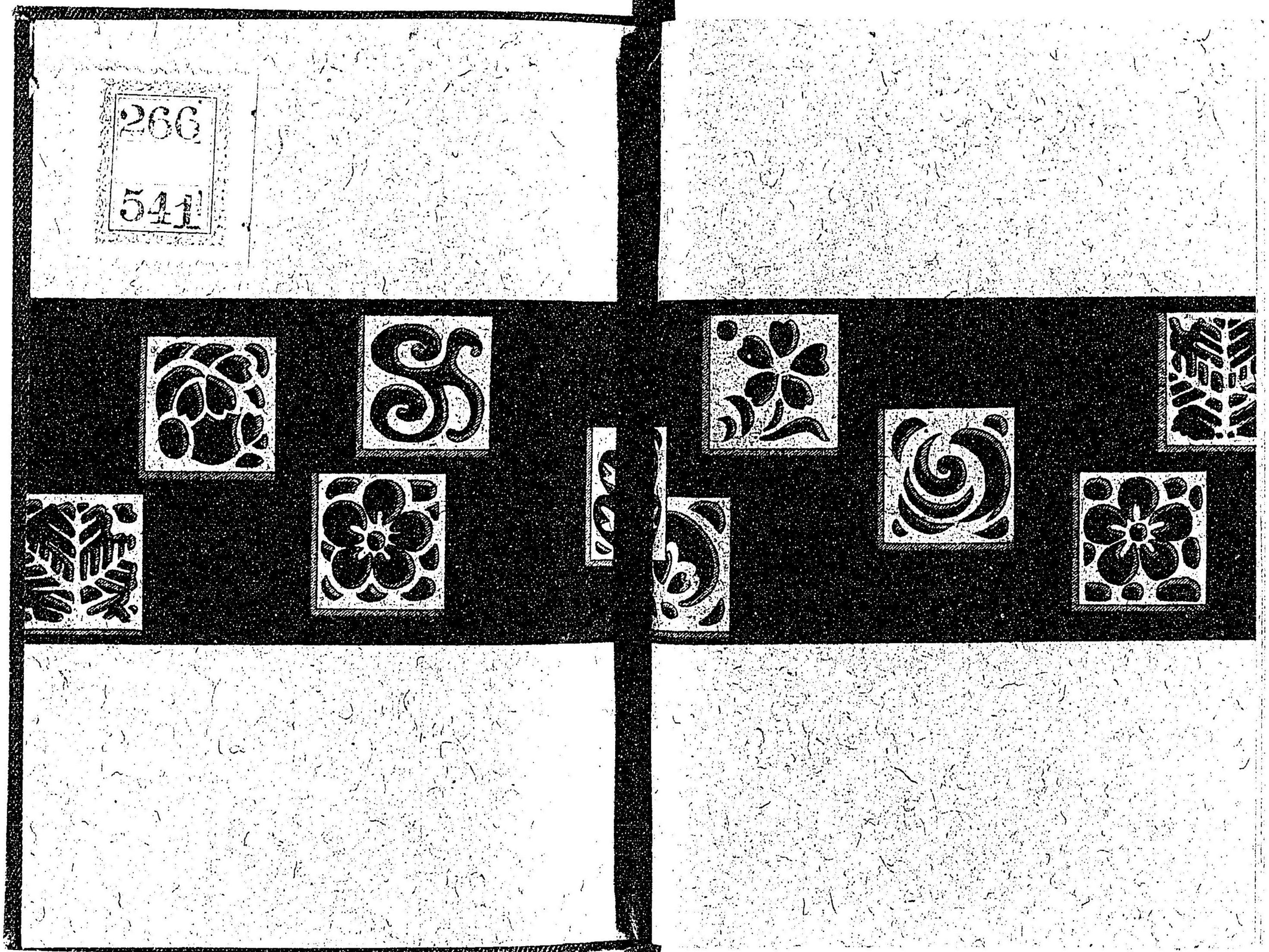
立川文庫 豪傑 第十五編 塚原卜傳 定價貳拾五錢

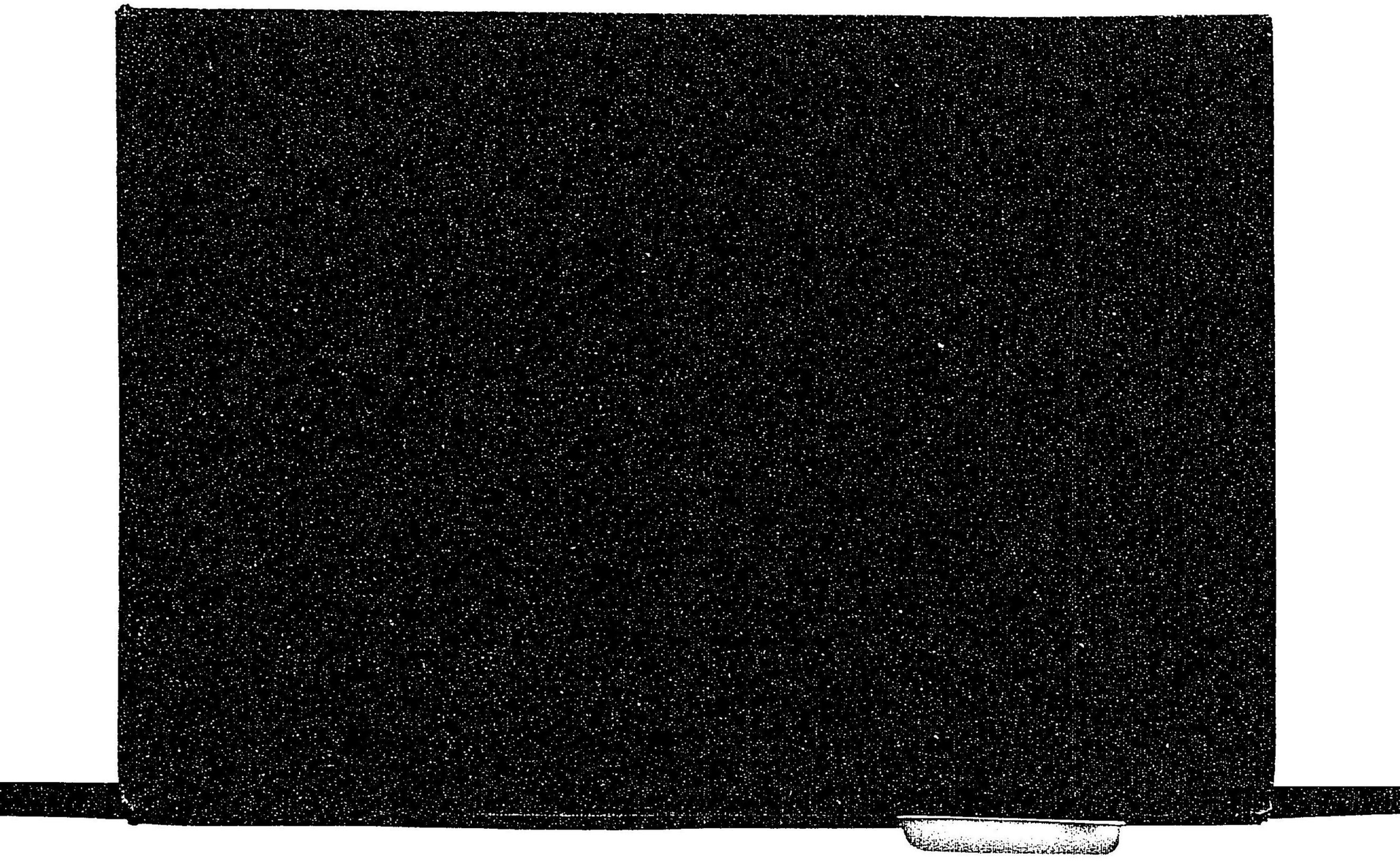
立川文庫 刈豊 第十六編 石童丸 定價貳拾五錢

立川文庫 奇談珍聞 第十七編 水戸黄門關西漫遊記 定價貳拾五錢

立川文庫 赤穂義士 第十八編 大石内藏助 定價貳拾五錢

266
541





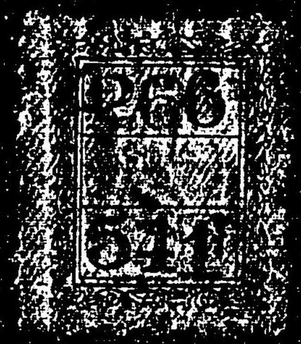
097760-000-6

特65-404

柳生重兵衛旅日記

野花散人／著

M44
DBS-1699

立川文庫
第一編

柳生十兵衛旅日記